



潮遺跡群潮神明宮前遺跡 3

安曇野市消防団第7分団第1部詰所新築工事に伴う
第3次発掘調査報告書

2019. 3

安曇野市教育委員会

表紙写真 SB6 出土ガラス小玉

裏表紙写真 発掘調査地遠景（西から）



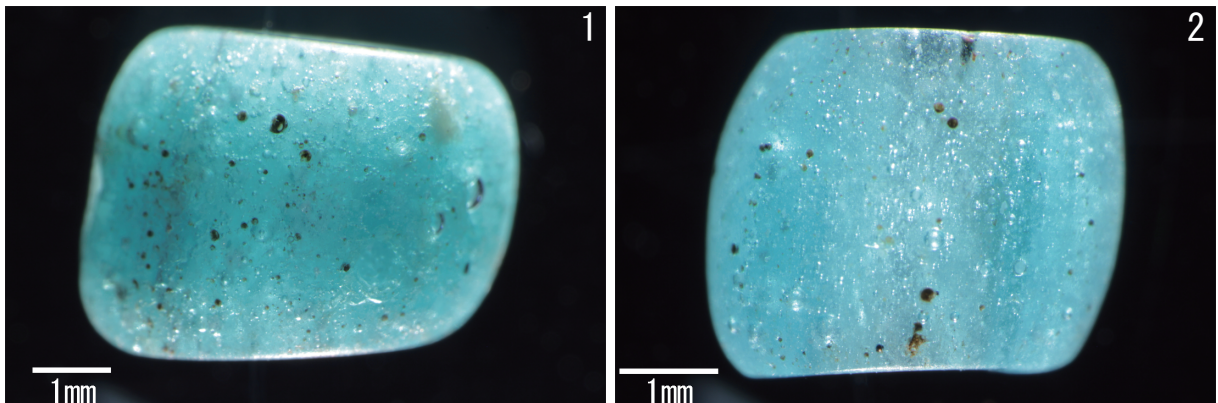
1 調査地遠景（東から）



2 完掘状況（上が東）



3 SB2カマド遺物出土状況



4 ガラス小玉（透過光、数字は分析No.）（株式会社パレオ・ラボ撮影）

序

安曇野市の埋蔵文化財は、この地域の歴史を理解するためにはかけがえない市民共有の財産です。安曇野市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査等を通じて得られた、地域の歴史資料の蓄積及び調査結果の公開普及に努めてまいりました。

本書では、平成28年度安曇野市消防団第7分団第1部詰所新築工事に際して実施した、潮遺跡群潮神明宮前遺跡第3次発掘調査の成果をまとめました。この遺跡では、旧明科町教育委員会が2次にわたる発掘調査を実施しており、これまでに古墳時代後期の円墳及び平安時代後半の集落跡を確認しています。平成17年（2005）の第2次発掘調査で見つかった古墳時代の円墳である潮古墳群8号墳の石室や周溝からは、勾玉・金環・ガラス小玉の他、まとまった量の須恵器が出土しており、古墳造営者の力の強さをうかがうことができました。

本書に掲載した第3次発掘調査では、平安時代後半の集落跡に加え、弥生時代後期の集落跡の存在も確認しました。この遺跡で、これまでに見つかっている平安時代の遺構・遺物の分布範囲から考えると、市内でも有数の平安時代集落であることが有力になってきました。また、弥生時代後期の遺構からは、市内で初めて弥生時代のガラス小玉が出土しており、200㎡という決して広くはない発掘調査ですが、大きな成果があったといえます。

末筆となりますが、本書をまとめるにあたり、多くの皆様、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。

本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野地域の歴史・文化の解明に役立つことを祈念し序とさせていただきます。

平成31年（2019）3月

安曇野市教育委員会
教育長 橋渡 勝也

例言

- 1 本書は、長野県安曇野市ながのけんあづみのに所在する、潮遺跡群うしお潮神明宮前遺跡うしおしんめいぐうまえ第3次発掘調査の報告書である。
- 2 本書掲載の調査は、安曇野市教育委員会が実施し、安曇野市が費用負担した。
- 3 本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課が行った。執筆は土屋和章、横山幸子が担当し、山下泰永が統括した。執筆分担は以下のとおりである。
横山幸子：第2章1 土屋和章：前記以外
- 4 出土資料の自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに業務委託した。
- 5 本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。ただし、第7章では節末に掲載した。
- 6 本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 7 調査全般にわたり以下の方々から、ご指導・ご協力をいただきました。(敬称略・五十音順)
小松学、白鳥章、直井雅尚、原明芳、細尾みよ子、百瀬新治、山田真一

凡例

- 1 発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2016年）の組み合わせである次の表記を、遺物注記等を使用した。

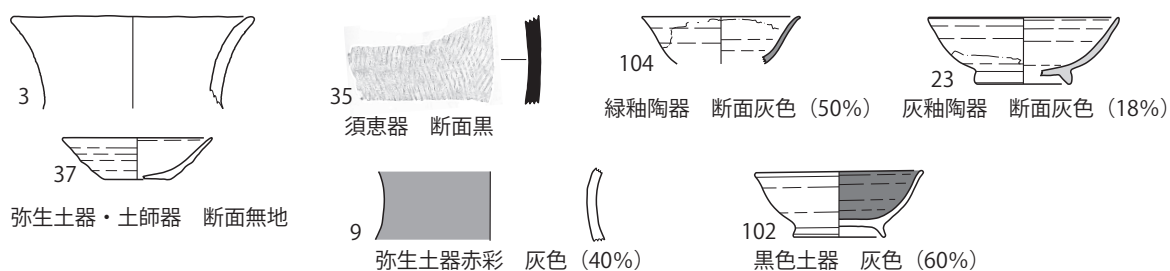
潮遺跡群潮神明宮前遺跡第3次発掘調査：USM16

- 2 調査及び本書での遺構名は、次の略号を使用している。

SB：竪穴建物跡 SK：土坑 SX：性格不明遺構 P：ピット

- 3 遺構・遺物の法量の表示で、残存箇所のみを計測した場合は（ ）で示した。

- 4 本書実測図で遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。



- 5 土器の記載では、器形について「形土器」の表記を省略した。

例 甕形土器：甕 高坏形土器：高坏

- 6 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。

- 7 本書では、平成17年（2005）10月1日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「東筑摩郡」、「明科町」のように表記した。

- 8 本書掲載の地形図は個別の記載のない場合、安曇野市都市計画基本図（1/2,500）を基図とし、調製したものである。

- 9 文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。

埋蔵文化財センター：埋文セ 教育委員会：教委 編纂委員会：編纂委

目次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・挿表目次・写真目次

第1章 調査の契機と経過	1
1 調査の概要	1
2 事業計画の概要	1
3 調査の契機と経過	2
4 試掘調査	3
5 調査体制	4
6 発掘作業・整理作業の経過	4
7 調査日誌抄	4
第2章 遺跡の位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
3 潮神明宮前遺跡の概要	7
第3章 調査の方法	12
第4章 層序	16
第5章 遺構	17
1 弥生時代の遺構	17
2 平安時代の遺構	18
第6章 遺物	28
1 弥生時代の遺物	28
2 平安時代の遺物	29
3 中世の遺物	34
第7章 自然科学分析	45
1 潮神明宮前遺跡出土ガラス玉の蛍光X線分析	45
2 放射性炭素年代測定	47
3 潮神明宮前遺跡出土炭化材の樹種同定	51
4 土師器付着物の材質分析	53
第8章 調査の総括	56
1 弥生時代の潮神明宮前遺跡	56
2 平安時代の潮神明宮前遺跡	57
写真図版	60
引用・参考文献	68
調査報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第19図	SK 2	27
第2図	試掘トレンチ配置図	3	第20図	SX 1	27
第3図	調査区配置図	8	第21図	計測部位	29
第4図	第1次調査遺構配置図	9	第22図	SB 2 出土土器法量散布図	32
第5図	第2次調査遺構配置図	10	第23図	SB 5 出土土器法量散布図	33
第6図	潮神明宮前遺跡付近の遺跡	11	第24図	弥生時代の土器	35
第7図	グリッド配置図	13	第25図	平安時代の土器 1	36
第8図	調査区全体図	14	第26図	平安時代の土器 2	37
第9図	C区全体図	15	第27図	平安時代の土器 3	38
第10図	基本土層	16	第28図	平安時代の土器 4 ・ 中世の遺物 ・ 金属製品 ・ 石製品 ・ ガラス製品	39
第11図	第2次調査土層概念図	16	第29図	暦年較正結果	50
第12図	SB 2 カマド付近遺物出土状況	19	第30図	土器付着物の試料採取部位	51
第13図	SB 1	22	第31図	炭化材の走査型顕微鏡写真	53
第14図	SB 2 ・ SB 3	23	第32図	土師器付着物の付着状況と 赤外分光スペクトル図	55
第15図	SB 4 ・ SK 1	24	第33図	潮神明宮前遺跡周辺の調査状況	59
第16図	SB 5 ・ SB 6	25			
第17図	SB 7	26			
第18図	SB 8 ・ SK 3	26			

挿表目次

第1表	事務手続き経過	2	第13表	ガラス製品観察表	44
第2表	潮神明宮前遺跡発掘調査記録	10	第14表	分析対象一覧	45
第3表	潮神明宮前遺跡付近の遺跡	11	第15表	半定量分析結果	46
第4表	器種分類	30	第16表	測定試料及び処理	48
第5表	SB 2 出土土器の種別	31	第17表	放射性炭素年代測定及び 暦年較正の結果	49
第6表	SB 2 出土土器の器種	31	第18表	樹種同定結果	52
第7表	SB 5 出土土器の器種	33	第19表	分析試料の詳細	54
第8表	弥生時代の土器観察表	40	第20表	生漆の赤外吸収位置とその強度	54
第9表	平安時代の土器観察表	40	第21表	安曇野市周辺のガラス小玉出土例	57
第10表	中世の遺物観察表	44	第22表	平安時代の遺構密度	57
第11表	金属製品観察表	44			
第12表	石製品観察表	44			

写真目次

1	調査地遠景（西から）	60	15	SB 4 完掘状況（西から）	63
2	調査区遠景（南東から）	60	16	SB 5 カマド完掘状況（西から）	63
3	調査区全景（上が北）	61	17	SB 5 完掘状況（西から）	63
4	C区完掘状況（上が東）	61	18	SB 5・6 完掘状況（北から）	64
5	調査区遠景（北東から）	62	19	SB 7 完掘状況（北から）	64
6	調査前状況（北西から）	62	20	SB 8 完掘状況（西から）	64
7	C区東壁基本土層	62	21	SK 1 完掘状況（北から）	64
8	SB 1 カマド完掘（西から）	62	22	SK 2 完掘状況（北から）	64
9	SB 1 黒色土器B（21）出土状況	62	23	SK 3 遺物出土状況	64
10	SB 1 完掘状況（西から）	63	24	SX 1 完掘状況（西から）	64
11	SB 2 カマド遺物出土状況（南から）	63	25	調査後現況（西から）	64
12	SB 2 カマド完掘状況（南から）	63	26	出土遺物 1	65
13	SB 2 完掘状況（南から）	63	27	出土遺物 2	66
14	SB 3 完掘状況（北から）	63	28	出土遺物 3	67

第1章 調査の契機と経過

1 調査の概要

うしお いせきぐんうしおしんめいぐうまえ

潮 遺跡群 潮 神明宮前遺跡 第3次発掘調査

所在地 ながの けん あづみの しあかしなひがしかわて
長野県安曇野市明科 東川手532番2

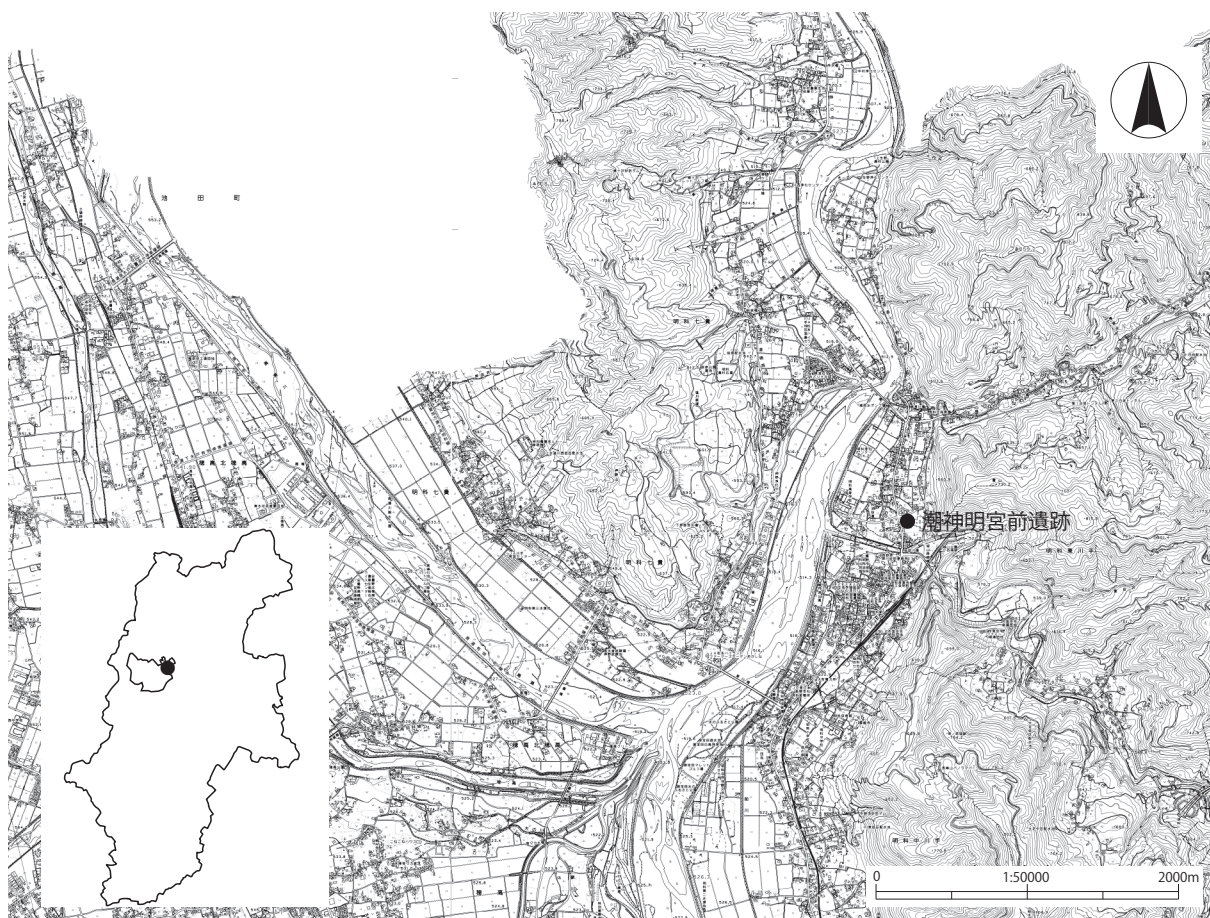
調査面積 200㎡

発掘作業 平成28年(2016)6月1日(水)～平成28年(2016)8月1日(月)

整理作業 平成28年(2016)8月2日(火)～平成31年(2019)3月29日(金)

2 事業計画の概要

潮遺跡群潮神明宮前遺跡(以下、「潮神明宮前遺跡」とする。)第3次発掘調査の調査原因となった事業は、安曇野市による平成28年度安曇野市消防団第7分団第1部詰所新築工事である。新築建物は、鉄骨造・平屋建て、建築面積153.83㎡の設計である。施工地は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていたため、保護協議とともに安曇野市教育委員会が試掘を実施し、埋蔵文化財の存在を確認した。



第1図 遺跡位置図

3 調査の契機と経過

潮神明宮前遺跡第3次発掘調査は、平成28年度安曇野市消防団第7分団第1部詰所新築工事にかかる緊急発掘調査である。この遺跡では、これまでの調査で古墳時代後期の円墳及び平安時代の集落跡が確認されているため、平成28年（2016）5月12日（木）に敷地内で文化財保護法第99条に基づき試掘調査を実施した（安曇野市教委2018）。試掘調査の結果、地表下50～60cmで平安時代の遺構・遺物を確認し、本件工事での掘削による埋蔵文化財への影響は不可避であることが判明したため、記録保存のための発掘調査を実施した。

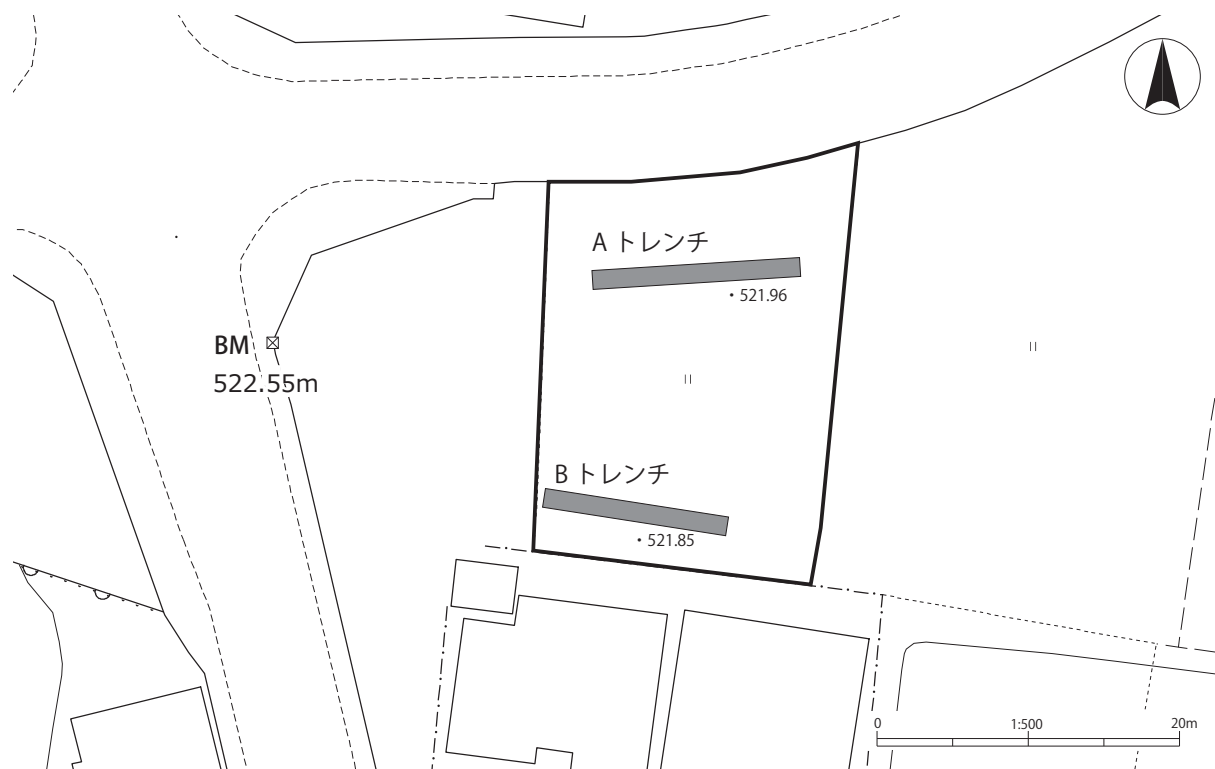
第1表 事務手続き経過

	年月日	文書番号	内容
1	平成28年5月6日	27文Zア-1 第15号	平成28年5月6日付け試掘依頼をうけ、市教委にて文化財保護法第99条に基づく試掘調査実施を決定する。
2	平成28年5月12日	—	上記1の試掘調査を実施。
3	平成28年5月17日	28文Zア-1 第20号	上記2の試掘調査にかかる「発掘調査終了報告書」を市教委教育長から県教委教育長にあてて提出する。
4	平成28年5月20日	28財管Gア-3 第2号	「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」（文化財保護法第94条）が安曇野市長から市教委に提出される。
5	平成28年5月20日	28文Zア-1 第26号	上記4通知を「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知（潮遺跡群潮神明宮前遺跡）」にて、市教委教育長から県教委教育長に進達する。
6	平成28年5月27日	28教文第8-36号	「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」にて県教委教育長から、記録作成のための発掘調査の指示通知が発出される。
7	平成28年5月30日	—	上記6通知を市教委にて受理する。
8	平成28年6月1日 ～平成28年8月1日	—	発掘調査を実施する。
9	平成28年8月1日	28文Zア-1 第71号	「埋蔵物発見届」を市教委教育長から安曇野警察署長あてて提出する。「埋蔵文化財保管証」を市教委教育長から県教委教育長あてて提出する。
10	平成28年8月5日	28文Zア-1 第78号	「発掘調査終了報告書」を市教委教育長から県教委教育長あてて提出する。
11	平成28年10月4日	28教文第20-63号	「文化財の認定及び県帰属について（通知）」が県教委教育長から発出される。
12	平成28年10月11日	28文Zア-1 第117号	上記11の通知を市教委にて受理する。
13	平成29年3月15日	28文Zア-1 第223号	「出土文化財譲与申請書」を市教委教育長から県教委教育長あてて提出する。
14	平成29年3月27日	28教文第24-43号	上記13の譲与申請に対して「出土文化財の譲与について（通知）」が県教委教育長から発出され、譲与が承認される。
15	平成29年3月29日	28文Zア-1 第240号	上記14の通知を市教委にて受理する。

4 試掘調査

今回の公共施設建設地付近では、平成10年（1998）、平成17年（2005）の発掘調査で古墳時代後期の古墳及び平安時代の集落跡が確認されており、今回の施工地にも埋蔵文化財が存在する可能性が極めて高いと予測していた。このため、埋蔵文化財の残存状況確認を目的として、平成28年（2016）5月12日（木）に、安曇野市教育委員会が文化財保護法第99条に基づいて試掘調査を実施した（安曇野市教委2018）。

試掘調査では、敷地内2箇所にトレンチを設定して土層観察及び遺構・遺物の検出を試みた。調査の結果、Aトレンチで平安時代の遺構2箇所及び土器類、Bトレンチからも平安時代の土器類が出土し、地表下50～60cmに平安時代の遺構が良好に残存していることを確認した。



第2図 試掘トレンチ配置図



Aトレンチ（東から）



Aトレンチ土層

5 調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

	平成28年度	平成29年度	平成30年度
事務局	教育部 文化課	教育部 文化課	教育部 文化課
文化課長	那須野雅好	那須野雅好	那須野雅好
文化財保護係	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章、横山幸子	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章、横山幸子	山下泰永（課長補佐兼係長） 土屋和章、横山幸子
調査員	大澤慶哲、土屋和章、松田洋輔	土屋和章、松田洋輔	土屋和章
作業参加者	小穴金三郎、等々力哲男、 中村哲也、村井龍彦、三澤俊秀、 田多井智恵、宮下智美、横山幸子	田多井智恵、細尾みよ子、 宮下智美	田多井智恵、宮下智美、 細尾みよ子、横山幸子
内容	発掘作業、整理作業	整理作業、保存処理、自然科学 学分析（ガラス）	整理作業、自然科学分析（炭 化物）

6 発掘作業・整理作業の経過

潮神明宮前遺跡第3次発掘調査における現場での発掘作業は、平成28年（2016）6月1日（水）～8月1日（月）に実施した。詳細は、調査日誌抄として後述する。

整理作業は、平成28年（2016）8月2日（火）～平成31年（2019）3月29日（金）に断続的に実施し、本書を発行し全事業を終了した。整理作業においては、遺物の洗浄を平成28年度中に終了し、平成29年度は注記、平成30年度は遺物接合、図版整理、遺物実測図作成、写真撮影及び報告書執筆を行った。

7 調査日誌抄

平成28年（2016）

- | | |
|---|---|
| 6月1日（水） 表土除去開始、仮囲い設置、機材等搬入。 | 6月14日（火） 水没した調査区の排水作業。SB5精査、遺物出土量減少。SB1精査。 |
| 6月2日（木） 表土除去完了、機材等搬入。 | |
| 6月3日（金） 作業なし。調査区内に周辺から浸水あり。 | 6月15日（水） 調査区浸水のため排水作業。SB5セクション実測。SB1で近代以降の暗渠を確認。SB2・3精査、切り合い関係確認のためサブトレンチ設定。 |
| 6月6日（月） 遺構検出、竪穴建物跡3棟を検出。基準点・グリッド設定測量。 | |
| 6月7日（火） 遺構検出、竪穴建物跡2棟を検出。雨天のため16:00で作業終了。 | 6月16日（木） SB2・3サブトレンチ精査。東隣の圃場畦畔養生のため、調査区東壁に土留め設置。また調査区内に排水用水路設定。雨天のため11:30で作業終了。 |
| 6月8日（水） SB5精査開始。調査区グリッド設定開始。 | |
| 6月9日（木） 雨天のため作業中止。 | 6月17日（金） 排水作業。SB5ベルト除去、床面検出、カマド精査。SB5南側の溝状遺構をSX1とする。 |
| 6月10日（金） SB5精査、覆土中で焼土範囲を検出。SB1精査。調査区グリッド設定。 | 6月20日（月） 排水作業。SB1精査、セクション実測後ベルト除去。SB5カマド精査、セクション実測。SX1精査。 |
| 6月13日（月） 雨天のため作業中止。 | |

- 6月21日（火） SB1 精査、近代以降の暗渠下にSB1床面が残存していることを確認。SB5カマド精査、完掘。
- 6月22日（水） SB1 精査、床面遺構検出、カマド精査、焼土採取。SB5東側で遺構を検出、精査開始。
- 6月23日（木） 雨天のため作業員作業中止。13:00からSB1カマド精査、セクション実測。
- 6月24日（金） SB1カマド精査、セクション実測。SB2・3精査継続、切り合い関係不明瞭。SB2にカマドがあるため先行して調査する。雨天のため16:45で作業終了。
- 6月27日（月） 排水作業。SB1カマド追加セクション実測、カマド焼土下まで掘り下げ。SB2床面まで掘り下げ、カマド付近に土器類が集中する。緑釉陶器出土。
- 6月28日（火） 雨天のため作業中止。午後、排水作業。
- 6月29日（水） 排水作業。SB5東側遺構の範囲確認、弥生土器が出土、平面形不明瞭。SB1壁面清掃、平面実測。SB2セクション実測、ベルト除去、カマド精査。
- 6月30日（木） 排水作業。SB1床面遺構精査、平面実測終了。SB1カマド付近で遺物・炭化物の集中を確認。SB2カマド精査、カマド西から遺物出土。SB5東側の弥生土器出土遺構をSB6として精査。SB6覆土からガラス小玉1点が出土したため、覆土全量を採取し、後日水洗選別する方針とする。
- 7月1日（金） SB6セクション実測、ベルト除去、焼土範囲実測。SB1カマド追加セクション実測。SB2精査。
- 7月4日（月） 排水作業。SB1カマド完掘。SB2カマド精査。SB6床面・壁面の精査、床面ピット検出、完掘。SX1が調査区東壁まで延伸することを確認。
- 7月5日（火） SB6完掘、平面実測、地床炉精査開始。SB2カマド精査、カマド内から土師器等がまとまって出土したため出土状況平面実測。SB4再検出、SB4西壁を切る土坑をSK1とする。SK1半割、セクション実測。SB4精査開始。
- 7月6日（水） SB2カマド内出土土器の取り上げ、焼土面まで掘り下げ。SB2壁面精査中にカマド外両側からも土器類がまとまって出土。SB4精査。SK1半割、セクション実測、SK1床面でSB4の外形線を確認。
- 7月7日（木） SB2床面ピット検出、完掘。SB4精査。SK1完掘。
- 7月8日（金） SB2完掘写真。SB4精査。SB3範囲確認、上端確認できず。
- 7月11日（月） 排水作業。SB3ベルト除去、床面清掃。SB4精査、床面付近で焼土・炭化物を確認。
- 7月12日（火） SB2完掘、平面実測終了。SB3平面実測終了。SB4精査、床面直上まで掘り下げ。SB2東側の土器・焼土分布範囲をSB7として精査開始。
- 7月13日（水） 雨天のため作業中止。
- 7月14日（木） 排水作業。SB4セクション実測。SB7遺構範囲確認。調査区東壁にかかる遺構をSB8として精査開始。雨天のため16:00に作業中止。
- 7月15日（金） 排水作業。SB7セクション実測後、ベルト除去。SB8精査。SK2精査、底面付近に炭化物・灰が堆積、セクション実測。SB8北側の土器集中地点をSK3として精査。
- 7月19日（火） 排水作業。SB4ベルト除去。SB7平面実測。SB8セクション実測後、ベルト除去。
- 7月20日（水） 排水作業。SB4壁面・床面清掃。SB7完掘、焼土半割。SB8完掘、平面実測。SK2完掘、平面実測。SK3完掘、平面実測。
- 7月21日（木） 排水作業。SB4完掘、平面実測。SX1精査。ピット精査開始。
- 7月22日（金） SX1精査、セクション実測。ピット精査。調査区東壁で基本土層の記録作成。
- 7月25日（月） SX1ベルト除去、完掘。調査区完掘写真撮影。B区東壁清掃。
- 7月26日（火） 雨天のため作業中止。
- 7月27日（水） B区東壁深掘りトレンチ設定。現場撤収開始。作業員作業終了。
- 7月28日（木） SX1・ピット類平面実測。水準測量。発掘調査機材返却。
- 7月29日（金） 発掘調査機材返却。
- 8月1日（月） 現場引き渡し。

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

安曇野市は長野県の松本盆地^{まつもと}に位置し、西を飛騨山脈^{ひだ}に、東を筑摩山地^{ちくま}に画される。安曇野市明科^{おしのやま}の押野山南麓^{おしのやま}では、盆地北部を流れる高瀬川^{たかせがわ}、中央付近を流れる穂高川^{ほたかがわ}が、盆地東縁を北流する犀川^{さいがわ}へ合流する。三川が合流した犀川は、松本盆地を出て山峡を流れ、長野盆地へ向かう。

潮神明宮前遺跡は、三川合流地点から約1.5km北、筑摩山地から西流し、犀川へ合流する会田川の右岸、筑摩山地^{かんだちやま}の雷山^{かんだちやま} (731m) の西麓に位置し、面積は南北約230m、東西約460mの規模とされる。雷山西麓は現在では水田地帯となっているが、山地からの湧水が多く、過去は湿地帯となっていた可能性が高い。

『明科町史』自然編は、犀川及び会田川^{あいだがわ}が形成した河岸段丘を5つに分類し、潮地籍の主たる平坦面を、会田川を挟んで南側の明科中川手^{なかがわて}と同じ第5段丘にあたる^{なかがわて}とした(明科町史自然編編纂委編2007)。潮神明宮前遺跡付近では、この第5段丘は約3/100の勾配で西に傾斜している。

第3次発掘調査区は、第5段丘の傾斜の中ほどに位置し、標高約523m、現犀川河床からの比高は約10mである。

2 歴史的環境

潮神明宮前遺跡の所在する安曇野市明科地域は、松本盆地東縁の北側とその東方に広がる山地からなる。犀川が形成した河岸段丘上では、豊科田沢地区^{たざわ}から明科南陸郷地区^{みなみりくこう}まで遺跡が断続的に分布しており、山間部には古墳や山城等が築かれている。以下では、主に安曇野市明科地域について歴史的環境を記載する。

現在までに、安曇野市では旧石器時代の遺跡は確認されていない。市内で人々の生活を確実に確認できるのは縄文時代早期以降で、明科中川手のこや城遺跡^{じょう}、上手屋敷遺跡^{わでやしき}等で押型文土器の破片、ほうろく屋敷遺跡で絡条体圧痕文土器が出土している。縄文時代前期には、明科中川手の上手屋敷遺跡、明科東川手の潮遺跡群^{ひがしかわて}塩田若宮遺跡^{しおだわかみや}、明科七貴のみどりヶ丘遺跡^{ななき}、ほうろく屋敷遺跡で集落が営まれた。縄文中期になると、市内全域で遺跡数は増加する。明科光の光遺跡群^{ひかる}北村遺跡^{きたむら}(以下、「北村遺跡」とする。)では、中央自動車道建設に先立つ発掘調査で縄文時代中期後葉～後期の土壙から多量の埋葬人骨が発見された(長野県埋文セ1993)。縄文時代中期後葉～後期は、こや城遺跡、塩田若宮遺跡でも集落跡を確認している。縄文時代晩期には、明科七貴の荒井遺跡^{あらい}で浮線文が施された水Ⅰ式段階の鉢が採集されている(明科町史編纂会編1984)。

弥生時代の主要な遺跡としては、ほうろく屋敷遺跡、みどりヶ丘遺跡が挙げられる。ほうろく屋敷遺跡では、第1・2次発掘調査で4群16基の再葬墓とそれに伴う土器30個体余りが出土した。また、みどりヶ丘遺跡からは、宅地造成に伴う発掘調査で弥生時代前・中期の土器・石器が多量に出土した(太田・河西1966)。特に集石遺構とされる礫群からは、変形工字文や磨消縄文が施された土器片に太

型蛤刃石斧や石包丁が相伴している。

明科地域における古墳時代前・中期の古墳及び集落の様相は、犀川右岸の段丘上に所在する龍門淵遺跡^{りゅうもんぶち}で、古墳時代前期の土器が出土している以外、未だ不明確なままである。古墳時代後期になると、古墳及び集落が造られる。明科東川手の潮古墳群は円墳を主体として構成され、発掘調査によって7～8世紀に比定される（明科町教委2005）。潮古墳群から会田川を挟んだ明科中川手の明科遺跡群^{さかえちよう}栄町遺跡（以下、「栄町遺跡」とする。）では、昭和53年（1978）の明科町役場議会棟建設にかかる発掘調査で6世紀後半の住居跡が確認された（明科町史編纂会編1984）。この住居跡は一辺5mほどで、直径15cm程度の河原礫を一面に敷き詰めた特異な遺構である。この調査以降、栄町遺跡ではこれまでに4次にわたる発掘が実施され、古墳時代後期の集落の広がり把握されている（安曇野市教委2013、2014）。

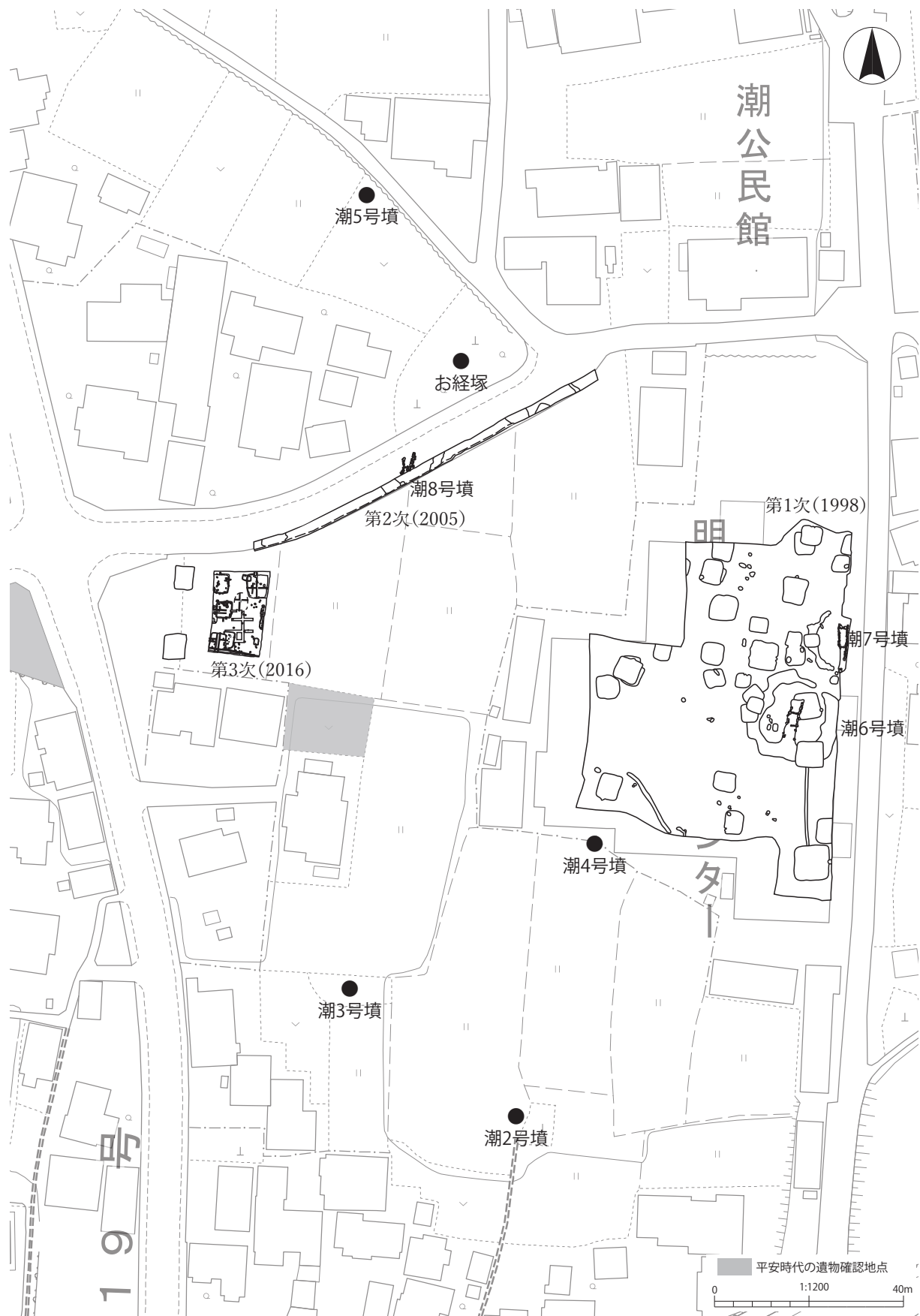
奈良時代になると明科中川手で7世紀後半創建と考えられる寺院跡が確認されており、明科廃寺^{あかしなはいじ}と呼ばれる。明科廃寺ではこれまでに5次にわたる調査を実施しており、平成11年（1999）に行われた第3次発掘調査によって掘立柱建物跡3棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物跡1棟などに伴って多量の瓦が出土した（明科町教委2000）。昭和28年（1953）の発掘調査と併せて、古代瓦のほか鴟尾や瓦塔が確認され、県内で最も古い時期の寺院のひとつとして注目されている。古代の集落としては、北村遺跡で7世紀後半～11世紀前半に集落が営まれ、竪穴建物跡19棟、掘立柱建物跡48棟が確認されている（長野県埋文セ1993）。また、ほうろく屋敷遺跡では、平安時代の竪穴建物跡20棟が検出された（明科町教委1991）。遺構の時期は、9世紀後半～10世紀前半及び11世紀後半～12世紀の2時期に大別される。

明科地域には中世の城館跡が多く残されており、こや城遺跡^{ちやうすやま}、茶臼山遺跡、上手屋敷遺跡^{とうのはら}、塔ノ原城址などで遺物の出土がある。このうち、塔原氏居館跡とされる上手屋敷遺跡では、平成元年（1989）と平成15年（2003）に発掘調査が実施され、内耳土器や青磁碗のほか安山岩製の宝篋印塔の相輪などが出土した（明科町教委2004）。

3 潮神明宮前遺跡の概要

潮神明宮前遺跡は、平成3年（1991）～5年（1993）の明科町内遺跡詳細分布調査の際に、周知の埋蔵文化財包蔵地^{うしおほしのつめ}として登録した遺跡で、潮橋ノ爪遺跡と一連の遺跡として認識された（明科町教委1994）。この遺跡では、今回を含めて3次にわたる発掘調査を実施しており、古墳時代及び平安時代の竪穴建物跡、古墳時代後期の円墳の存在が明らかになっている。

平成10年（1998）に明科町総合福祉センター建設に際し実施した第1次調査では、潮古墳群6号墳・7号墳の2基の古墳、4世紀初めの竪穴建物跡4棟、平安時代の竪穴建物跡29棟を調査した。このうち潮古墳群6号墳は墳丘の残存状況は良くないものの、平面形は南北15m、東西12mの隅丸方形を呈し、幅2～4mの周溝を有する。石室は床面に礫を敷き詰めており、玄室が幅1.6m、長さ5.5mで、羨道が幅2.5m、長さ4mである。石室内からの出土遺物は僅少であったが、周溝からは7世紀第3四半期及び7世紀末～8世紀初頭の2時期にわたる遺物が出土した。潮古墳群7号墳は、直径約15mの円墳と推測できる。石室では、床面に礫を敷き詰めており、玄室が幅1.5m、長さ3.9m、羨道は長さ約5mである。石室内及び周溝からの出土遺物は少ないが、潮遺跡群6号墳と同時期と推測されている。

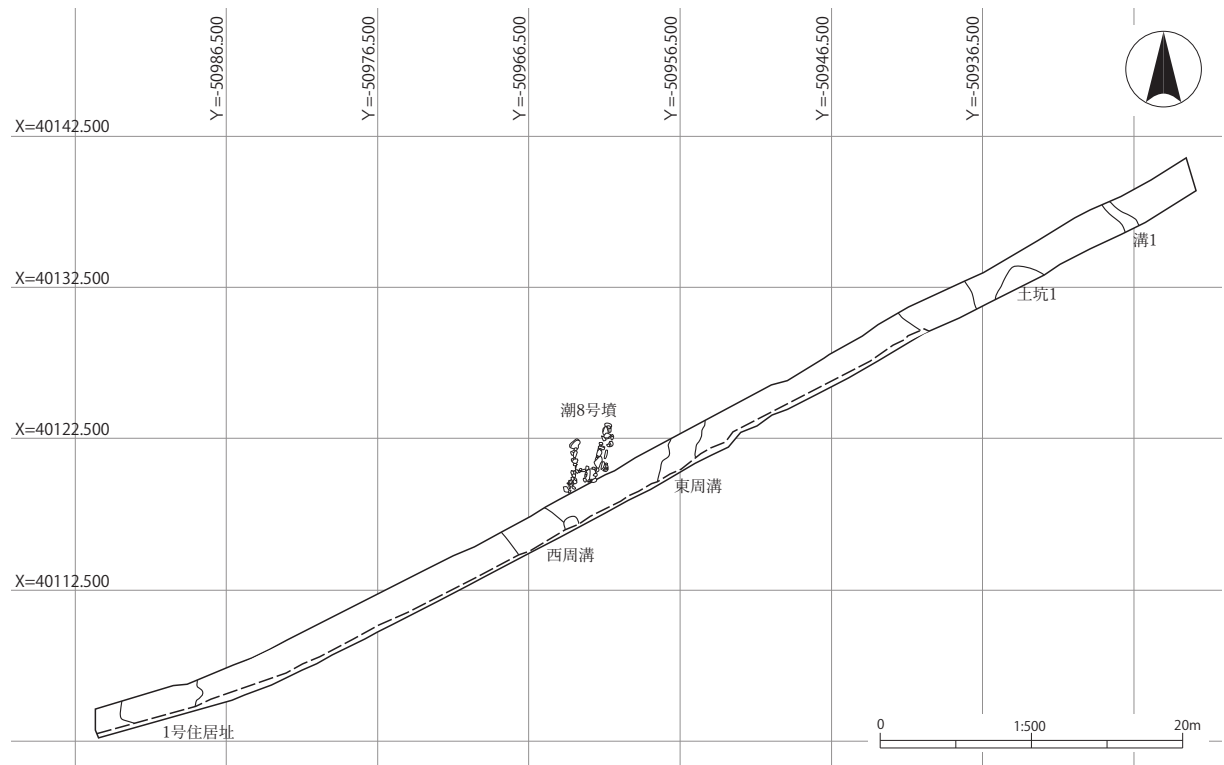


第3図 調査区配置図



第4図 第1次調査遺構配置図

第2章 遺跡の位置と環境

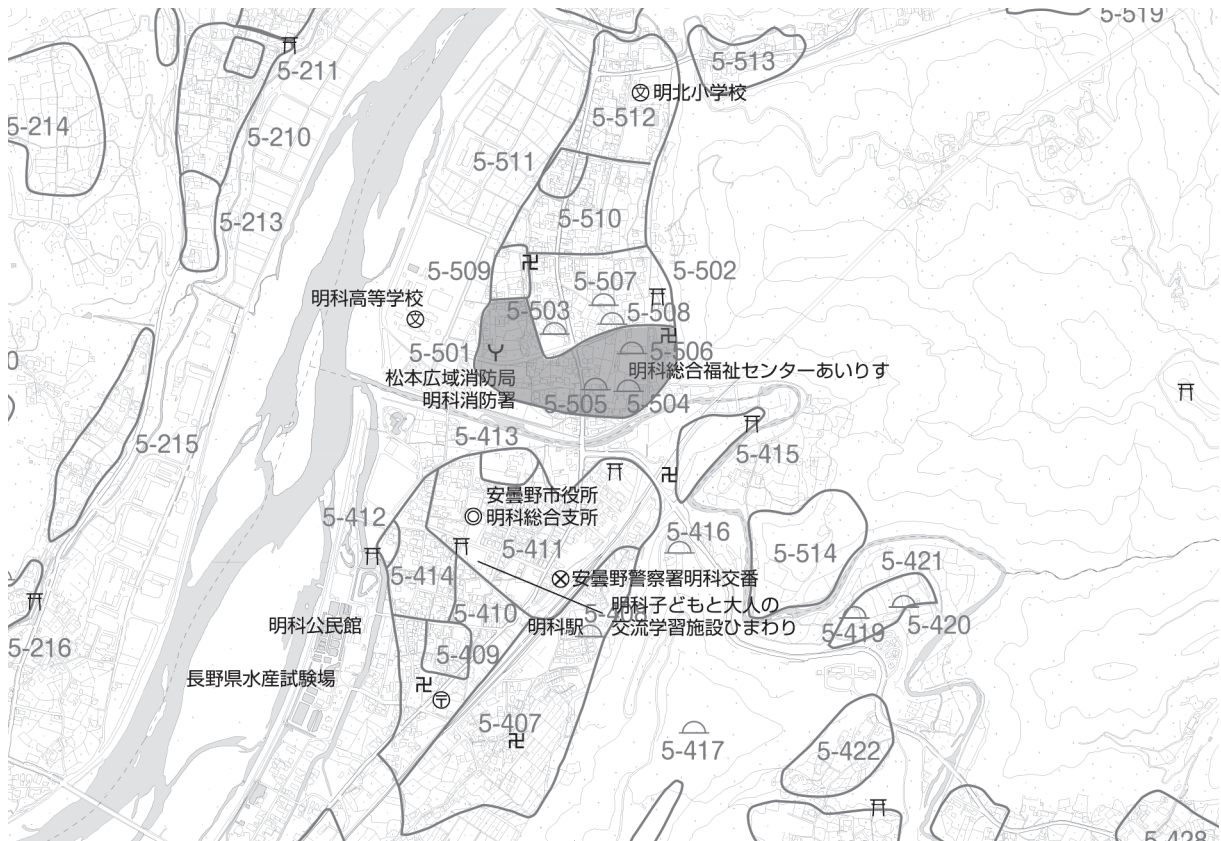


第5図 第2次調査遺構配置図（明科町教委2005を加工）

平成17年（2005）には、町道拡幅に際して明科町教育委員会が第2次発掘調査を実施した（明科町教委2005）。この第2次調査では、古墳時代後期の円墳1基を新たに発見し、潮古墳群8号墳と命名した。部分的な調査のため、石室及び墳丘の規模は不明確であるが、石室床面には一面に礫が敷き詰められ、玄室は幅1.3m、羨道は幅1.1mとなっている。周溝は幅2～3mで、周溝内からは7世紀末の須恵器、馬歯が出土した。また、調査区西側で確認した竪穴建物跡（1号住居址）は、一辺約4.9mの隅丸方形と推測され、出土遺物から9世紀中頃～10世紀に比定している。

第2表 潮神明宮前遺跡発掘調査記録

調査次	調査年	調査原因	遺構・遺物の概要	文献
第1次	平成10年 (1998)	公共施設	古墳（後期）2、竪穴建物跡（古墳前期4、平安29）、土壙、須恵器、土師器、金属製品、玉類	未報告
第2次	平成17年 (2005)	道路	古墳（後期1）、竪穴建物跡（平安1）、土壙、須恵器、金属製品、玉類	明科町教委2005
第3次	平成28年 (2016)	公共施設	竪穴建物跡（弥生2、平安6）、土坑、弥生土器、須恵器、土師器、金属製品、玉類	本書



第6図 潮神明宮前遺跡付近の遺跡（安曇野市埋蔵文化財包蔵地図（平成22年（2010）3月31日調製）を加工）

第3表 潮神明宮前遺跡付近の遺跡

No.	名称	所在地	種類	時代
5-210	塩川原遺跡	明科七貴	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
5-211	塩川原内堀館	明科七貴	城館跡	中世
5-213	孫五郎屋敷	明科七貴	散布地	縄文
5-214	塩川原上ノ平遺跡	明科七貴	城館跡・散布地	縄文・中世・近世
5-215	上野遺跡	明科七貴	散布地	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
5-216	やしき遺跡	明科七貴	散布地	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
5-407	明科遺跡群上郷遺跡	明科中川手	散布地	縄文・古墳・奈良・平安
5-408	明科遺跡群上郷古墳	明科中川手	古墳	古墳
5-409	明科遺跡群明科廃寺	明科中川手	社寺跡	古墳・奈良・平安
5-410	明科遺跡群県町遺跡	明科中川手	集落跡	古墳・奈良・平安
5-411	明科遺跡群栄町遺跡	明科中川手	集落跡	古墳・奈良・平安
5-412	明科遺跡群龍門淵遺跡	明科中川手	その他（祭祀）	弥生・古墳
5-413	明科遺跡群古殿屋敷	明科中川手	集落跡・城館跡	古墳・平安・中世・近世
5-414	明科遺跡群本町遺跡	明科中川手	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安
5-415	こや城	明科中川手	集落跡・城館跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世
5-416	念念寺1号墳	明科中川手	古墳	古墳
5-417	念念寺2号墳	明科中川手	古墳	古墳
5-419	武士平遺跡	明科中川手	散布地	古墳・中世・近世
5-420	武士平1号墳	明科中川手	古墳	古墳
5-421	武士平2号墳	明科中川手	古墳	古墳
5-422	吐中遺跡	明科中川手	散布地	縄文
5-501	潮遺跡群潮神明宮前遺跡	明科東川手	集落跡	古墳・奈良・平安
5-502	潮遺跡群新屋遺跡	明科東川手	散布地	古墳・奈良・平安
5-503	潮古墳群金山塚1号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-504	潮古墳群金山塚2号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-505	潮古墳群金山塚3号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-506	潮古墳群金山塚4号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-507	潮古墳群金山塚5号墳	明科東川手	古墳	古墳
5-508	潮古墳群お経塚古墳	明科東川手	古墳	古墳
5-509	潮遺跡群古屋敷遺跡	明科東川手	城館跡	古墳・奈良・平安・中世・近世
5-510	潮遺跡群浦田遺跡	明科東川手	散布地	古墳・奈良・平安・中世・近世
5-511	潮遺跡群古殿屋敷	明科東川手	城館跡	中世・近世
5-512	潮遺跡群塩田若宮遺跡	明科東川手	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
5-513	潮遺跡群三五山遺跡	明科東川手	散布地	縄文
5-514	潮遺跡群茶白山遺跡	明科東川手	城館跡・散布地	縄文・中世・近世

第3章 調査の方法

潮神明宮前遺跡第3次発掘調査の調査原因である平成28年度安曇野市消防団第7分団第1部詰所新築工事の事業地が、周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、平成28年（2016）に実施した試掘調査結果から、施工地に遺構が良好に残存していることを確認したため、記録保存のための発掘調査を念頭に事業者と保護協議を継続した。試掘結果から、遺構深度は50～60cmで、当該工事での掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であることを確認したため、事業者と保護協議を再度実施し、発掘調査を実施して遺跡の記録保存をはかることとした。

発掘調査は、建物建設範囲全体及び雨水浸透施設設置箇所を対象とした。調査面積は200㎡である。記録作成にはグリッド法を採用し、測量業者によって調査地全体に1辺2mの調査用グリッドを設定した。なお、本件発掘調査の基準点測量では、世界測地系を採用している。遺構の所在、遺物の出土位置等は、この調査用グリッドを基本として記載した。また、標高の基準としてグリッド測量実施の際にベンチマークを設定した。ベンチマークには、基準点杭（T1～T3）を使用した（第7図）。

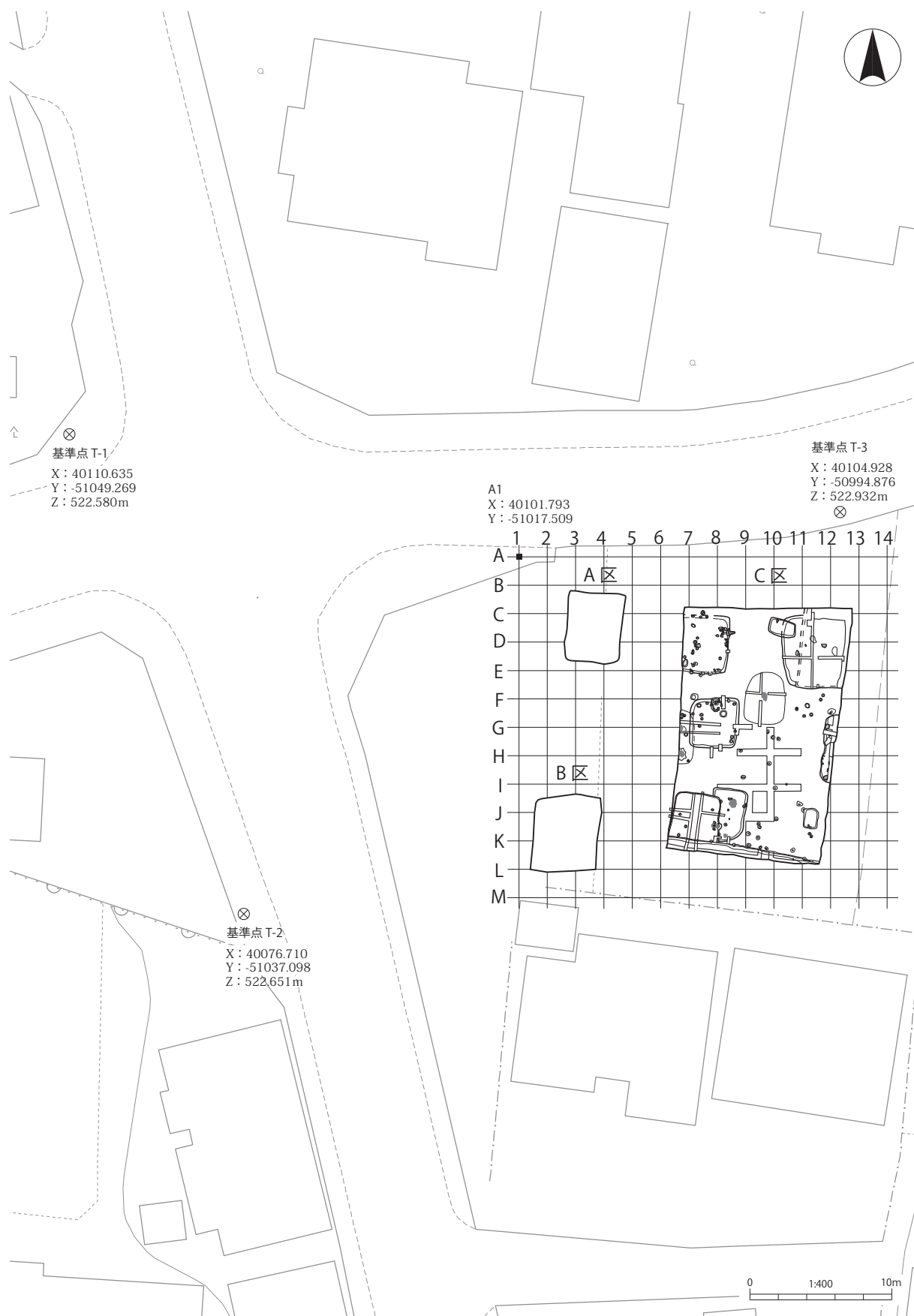
発掘調査では、契機となった工事の主たる掘削箇所3箇所について、A～Cの調査区を設けた。A・B区は雨水浸透施設設置箇所、C区は計画建物建設箇所である。このうちA・B区は、表土除去段階から浸水があり、常時排水を試みたが精査することができなかった。このため、C区でのみ詳細な発掘調査を実施した。

表土除去は、建設用重機を用いて現代の造成土及び遺構検出面直上までの堆積土を除去し、遺構検出面（Ⅳ層上面）直上からの掘削及び遺構検出は人力で行った。

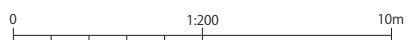
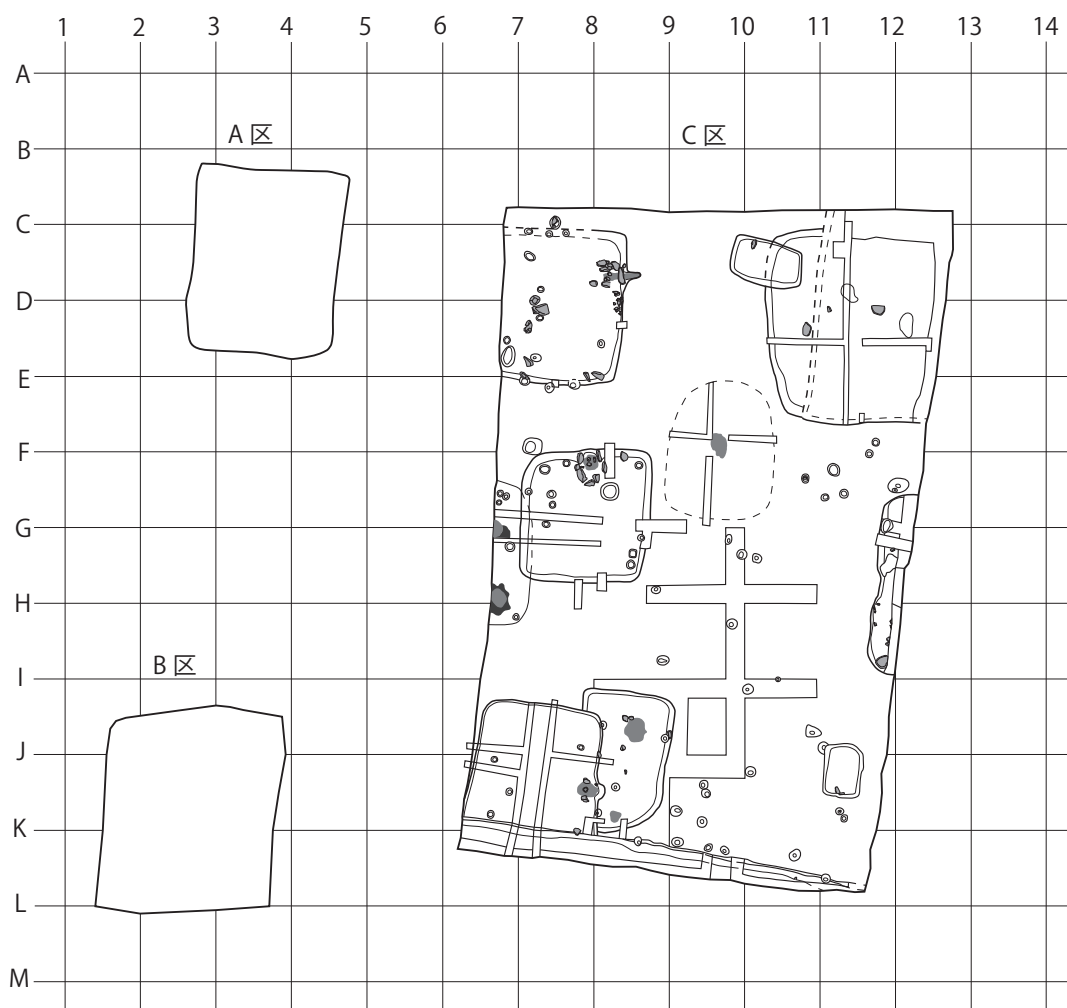
遺物の取り上げは基本的に遺構ごとに行い、遺構外出土遺物についてはグリッドごとに行った。遺構観測は調査用グリッドを基準として、調査員・作業員が現場で簡易遺方測量を実施した。記録写真は、現場・整理ともにデジタルカメラを使用した。

整理作業は、現場作業終了後に室内で行い、土器等の洗浄、注記、接合、実測、属性観察、図版作成・調整、写真撮影等及び報告書作成を行った。整理作業のうち金属製品の保存処理及び自然科学分析は、委託業務として業者委託した。注記は、試掘出土遺物以外はインクジェット式の注記機器を使用した。記載には、遺跡略号「USM16」を使用し以下の例によった。

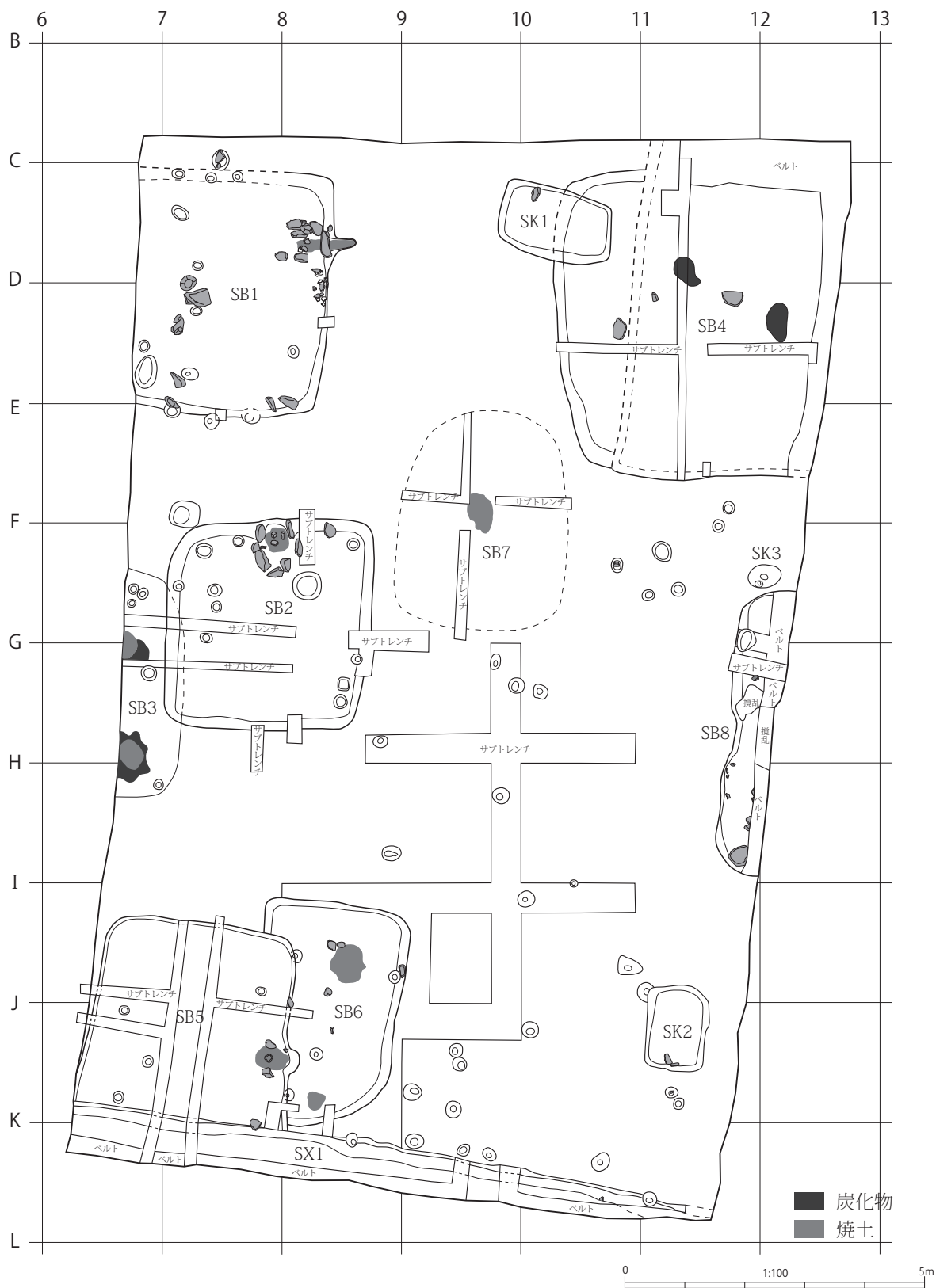
内容	注記
出土位置記録遺物	USM16 No.■ 遺構名・層名
出土遺構記録遺物	USM16 ■遺構名・層名



第7図 グリッド配置図



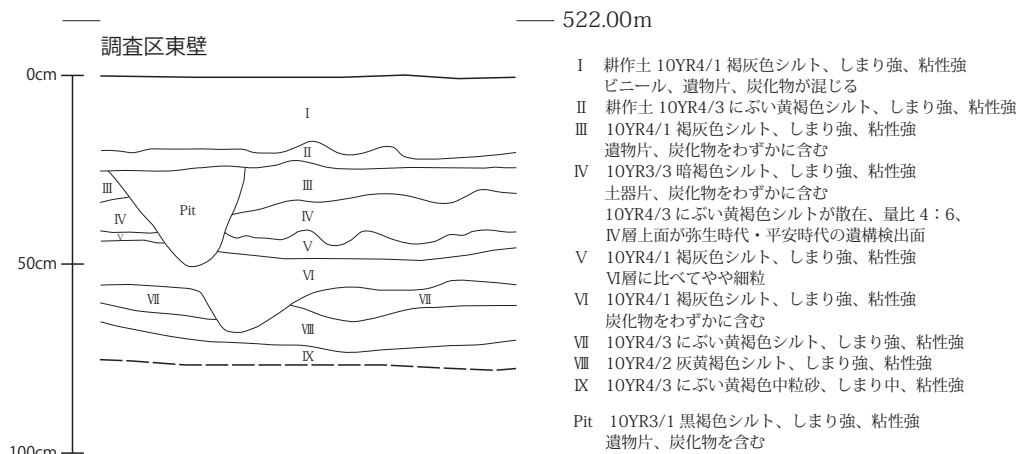
第8図 調査区全体図



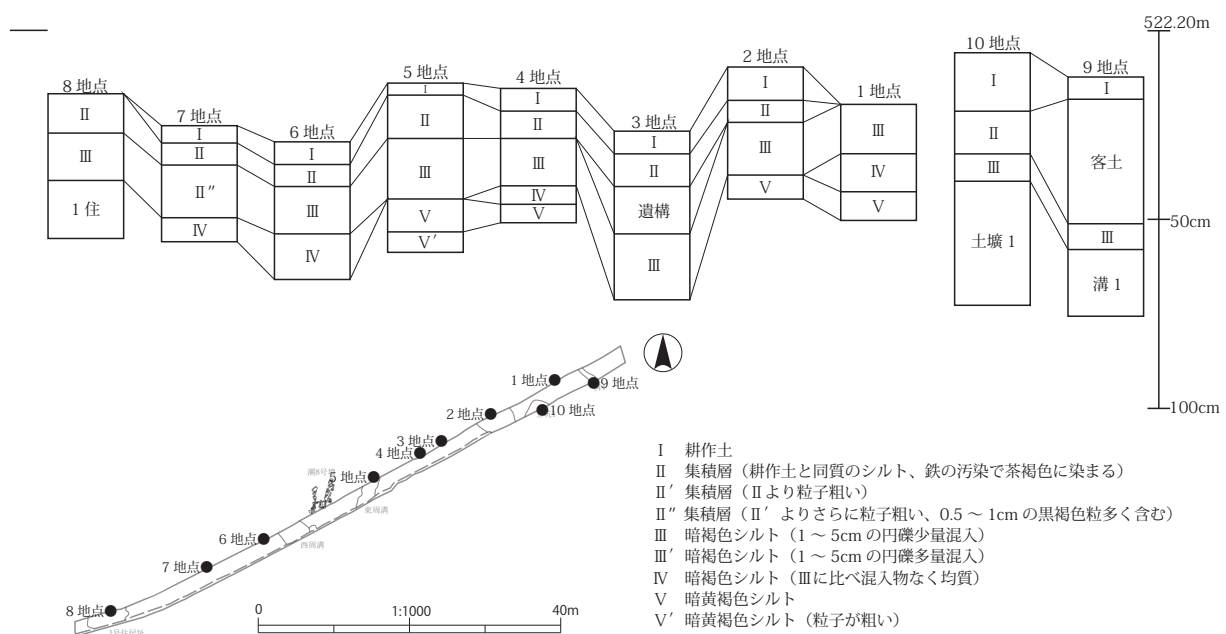
第9図 C区全体図

第4章 層序

今回の調査区で観察した基本土層の詳細は、第10図のとおりである。基本土層の観察は調査区東壁で実施し、地表面から深度約80cmまでに9層を確認した。このうちI・II層は、現代の耕作土である。III層は褐灰色シルトである。III層上面では、平安時代よりも新しい遺構の掘り込み（第10図Pit）を確認した。IV層は暗褐色シルトである。このIV層上面で、平安時代及び弥生時代後期の遺構を検出した。V～VIII層はシルトの堆積で、VI層は部分的に粉末状の炭化物を包含する。IX層は、にぶい黄褐色の砂の堆積である。IX層は、第2次調査で確認した「地山」に比定した。このため、IX層より深い位置に遺構等は存在しないと判断した。



第10図 基本土層



第11図 第2次調査土層概念図（明科町教委2005から作成）

第5章 遺構

潮神明宮前遺跡第3次発掘調査で確認された主な遺構は、竪穴建物跡8棟、土坑3基及びピットで、弥生時代後期及び平安時代に属すると考えられる。検出層位としては、基本土層Ⅳ層上面で、弥生時代及び平安時代の遺構を確認した。以下に、それぞれの詳細を記載する。

1 弥生時代の遺構

(1) SB3 (第14図)

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 F6・F7・G6・G7・H6・H7グリッド

平面形・規模 平面形上端は確認できなかったが、下端の確認から南北3.5×東西(1.0)mで隅丸方形を呈すると推測でき、南北軸方向はN4°Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.25mで、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、2層を確認した。

床面 床面で確認したP5～P9はどれも浅く、SB3に伴うものか確認できなかった。

炉 調査区内では、明確な炉は確認していない。ただし、直径約0.5mの焼土の分布が2箇所あり、地床炉の可能性もある。2箇所とも焼土は薄く、分布範囲は直径約0.5mのほぼ円形で、周辺に炭化物を多く包含する堆積土が広がっていた。

重複関係 東壁3分の2程度が、SB2と重複する。平面観察では前後関係を確定できなかったため、観察用ベルト及びサブトレンチを設定して断面観察を実施し、SB2がSB3を切ることを確認した。

時期 出土土器から、弥生時代後期に比定できる。

(2) SB6 (第16図)

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 I6・I7・I8・J6・J7・J8・K7グリッド

平面形・規模 南北3.7×東西2.4mで楕円形を呈すると推定できるが、平面形の検出は困難で、不正確さが残る。南北軸方向は、N4°Eである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、2層を確認した。

床面 床面では、直径0.15m程度のピットを4基確認した。SB6P1～SB6P3は深度が0.15m程度であり、主柱穴となる可能性は低いと考えられる。

炉 SB6床面の北側で、地床炉を確認した。炉の規模は直径0.6m程度で、平面形は不整形である。また、この地床炉とは別に、床面南に直径0.3m程度の焼土の分布を確認した。

重複関係 SB6南西を、SB5が切っている。

時期 出土土器から、弥生時代後期に比定できる。

(3) SB7 (第17図)

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 E9・E10・F8・F9・F10グリッド

平面形・規模 覆土に包含される粉末状炭化物の分布から、南北3.6×東西2.8mで楕円形を呈すると推定したが、明確な掘り込み等は確認していない。推定できる南北軸方向は、N5°Eである。

壁・堆積土 土層観察用のサブレンチを設定して、掘り込み及び覆土の確認を試みたが、明確な掘り込みは確認できなかった。このため、壁高は不明である。

床面 遺構の平面形及び覆土を確認できていないため、床面も確定できなかった。土層観察用サブレンチでの調査では、ピット等のSB7付属遺構も確認していない。

炉 SB7中央の床面で、平面規模0.4×0.6mの焼土の分布を確認した。

重複関係 SB7の範囲及び平面形は不明確であるが、この遺構と重複関係にある遺構は確認していない。

時期 出土土器から、弥生時代後期に比定できる。

2 平安時代の遺構

(1) SB1 (第13図)

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 C6・C7・C8・D6・D7・D8・E6・E7・E8グリッド

平面形・規模 南北4.0×東西(3.2)mで方形を呈し、カマドを基準にした東西軸方向は、N86°Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.4mで、壁は垂直に立ち上がる。覆土は、1層を確認した。

床面 床面では、SB1P1～SB1P11の11基のピットを確認した。ただし、SB1は北半分に大きく近現代の攪乱が見られるため、全てがSB1に関係するピットであるかは不明である。特に、SB1P5・SB1P6・SB1P7・SB1P11は、推定される北壁付近に位置しており、SB1構築後の遺構である可能性が高い。また、カマド周辺には三和土のような固く締まった堆積土が薄く分布していた。覆土の特徴として礫を多く包含し、南半分の床面には礫が散乱している状況であった。

カマド 東壁中央よりやや北よりで、カマドを確認した。カマド構築材である石材は燃焼部両袖に良好に残存しており、燃焼部上部にも横長の石材が架けられていた。煙道は東に延びており、確認できた長さは0.6mである。なお、カマド南側のSB1東壁及び床面でまとまった量の土器類が出土している。

重複関係 北壁付近を近現代の攪乱(暗渠か)に切られるが、床面付近のピットは残存していた。

時期 出土土器類から、松本平古代12期に比定できる。

(2) SB2 (第14図)

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 E7・E8・F7・F8・G7・G8グリッド

平面形・規模 南北3.4×東西3.1mで方形を呈し、カマドを基準にした南北軸方向は、N3°Wである。

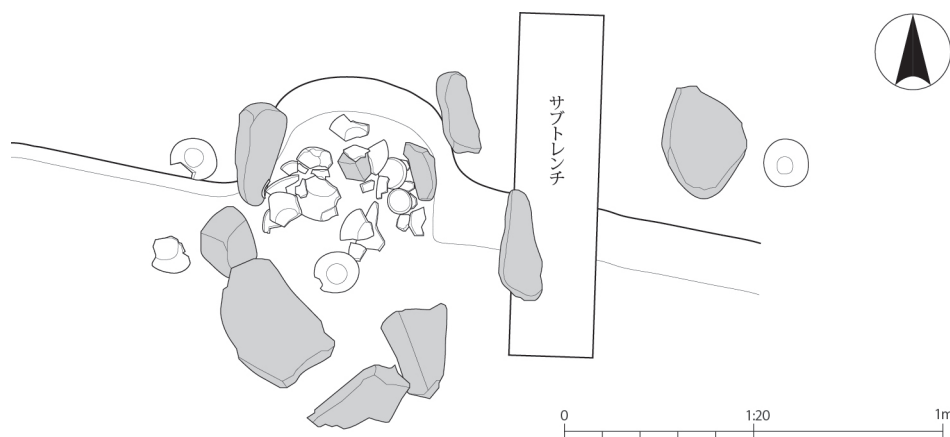
壁・堆積土 残存している壁高は約0.25mで、壁は垂直に立ち上がる。覆土は、2層を確認した。

床面 床面では、SB 2 P 1～SB 2 P 11の11基のピットを確認した。このうち、SB 2 P 1・SB 2 P 9・SB 2 P 6は、位置的に支柱穴になる可能性があるが、いずれも確認できた掘り込みは0.2m未満と浅い。また、カマド南東の床面で確認したSB 2 P 10は、土師器坏（82）・埴（96）のほか土器片、焼土、炭化物を多く包含する。

カマド 北壁中央で、カマドを確認した。カマド構築材である石材は燃焼部両袖に良好に残存していたほか、カマド全面にも石材が崩落している状況を確認できた。煙道は、明瞭には確認していない。SB 2 カマド付近からは、多量の土器類が出土した。これらは、ほぼ完形に復元できる個体が多く、短時間のうちにカマド周辺に意図的に廃棄されたと推測できる。

重複関係 西壁3分の2程度が、SB 3と重複する。前後関係は平面観察では確定できなかったため、土層観察用ベルト及びサブトレンチを設定して断面観察を実施し、SB 2がSB 3を切ることを確認した。

時期 出土土器類から、松本平古代11期に比定できる。



第12図 SB 2 カマド付近遺物出土状況

(3) SB 4 (第15図)

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 C10・C11・C12・D10・D11・D12・E10・E11・E12グリッド

平面形・規模 上端の平面形は不明瞭であるが、下端の平面形と併せて検討すると、東西で複数の遺構が重複している可能性が高い。検出時の規模は、南北4.7×東西（4.6）mで、方形を基本とした不整形であった。南北軸方向はN 6° Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.5mで、壁は垂直に立ち上がる。覆土は、3層を確認した。

床面 床面では、明確にSB 4に伴うピットは確認できておらず、炭化物の集中を2箇所確認した。いずれも平面形は楕円形で、長軸はそれぞれ約0.55m及び約0.7mである。

カマド 調査区内では、カマドは確認していない。

重複関係 北西隅付近で、SK 1に切られる。

時期 調査時は、平安時代の遺構と推定して精査を開始したが、平安時代の土器類のほかに弥生時代

第5章 遺構

後期の土器類も相当量が出土した。また、第7章2のとおりSB4床面採取炭化物の放射性炭素年代測定からは弥生時代後期の年代が得られており（第7章2）（試料No.2：PLD-37544）、覆土中または下層に当該期の遺構が重複して存在する可能性が高い。

(4) SB5（第16図）

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 I6・I7・I8・J6・J7・J8・K7グリッド

平面形・規模 南北(3.3)×東西3.6mで方形を呈し、カマドを基準にした東西軸方向は、N80°Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、2層を確認した。

床面 床面では、SB5P1～SB5P4の4基のピットを確認した。いずれも、支柱穴となるかは不明である。

カマド 東壁中央で、カマド1基を確認した。カマド構築材である石材は、カマド両袖に少量が残存していた。また、確認できた煙道長は東側に約0.2m程度である。

重複関係 東壁のほぼ全面でSB6を切る。また、南壁の全面をSX1に切られている。

時期 出土土器類から、松本平古代12期に比定できる。

(5) SB8（第18図）

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 F11・F12・G11・G12・H11・H12グリッド

平面形・規模 調査区東壁にかかる箇所検出した遺構であり、調査区内では西壁隅を2箇所確認した。南北4.7×東西(0.8)mで方形を呈すると推定できる。南北軸方向は、N7°Eである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.25mで、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、1層を確認した。

床面 床面では、明確にSB8に伴うピットは確認できなかった。床面には、礫が多く散布する。

カマド 調査区内では、カマドは確認していない。調査区外にカマドが存在する可能性が高い。

重複関係 西壁北隅付近で、P10に切られる。これ以外に、調査区内で他の遺構との重複関係はない。

時期 出土土器類から、松本平古代13期に比定できる。

(6) SK1（第15図）

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 C9・C10グリッド

平面形・規模 東西1.9×南北0.7mで長方形を呈し、長軸方向はN75°Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.35mで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は、1層を確認した。

この覆土は、炭化物を多く包含する。

床面 床面遺構は確認していない。

重複関係 SK1の東半分程度が、SB4と重複関係にある。堆積土の断面観察から、SK1がSB4より

新しいと判断した。

時期 出土土器類から平安時代の遺構と考えられるが、詳細時期は不明である。

(7) SK 2 (第19図)

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 I11・J11グリッド

平面形・規模 南北1.5×東西1.0mで長方形を呈し、長軸方向はN6°Eである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.1mで、壁はごく緩やかに立ち上がる。覆土は、1層を確認した。

堆積土の層厚が0.1mと浅いため、掘り込み面がⅢ層上面である可能性もある。

床面 床面遺構は確認していない。遺構内南壁付近で、長さ15cm程度の礫2点を確認した。

重複関係 SK 2の北西隅付近で、P25を切る。

時期 出土土器が小破片かつ少量であるため、帰属時期は不明である。

(8) SK 3 (第18図)

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 F11・F12グリッド

平面形・規模 東西0.6×南北0.4mで楕円形を呈し、長軸方向はN81°Eである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.15mで、壁はごく緩やかに立ち上がる。覆土は、1層を確認した。

床面 床面で直径0.1m程度の掘り込みを確認したが、SK 3に伴う遺構であるかは不明である。

重複関係 他の遺構との重複関係はない。

時期 出土土器類から、松本平古代12期に比定できる。

(9) SX 1 (第20図)

検出層位 基本土層Ⅳ層上面

位置 J6・K6・K7・K8・K9・K10・K11グリッド

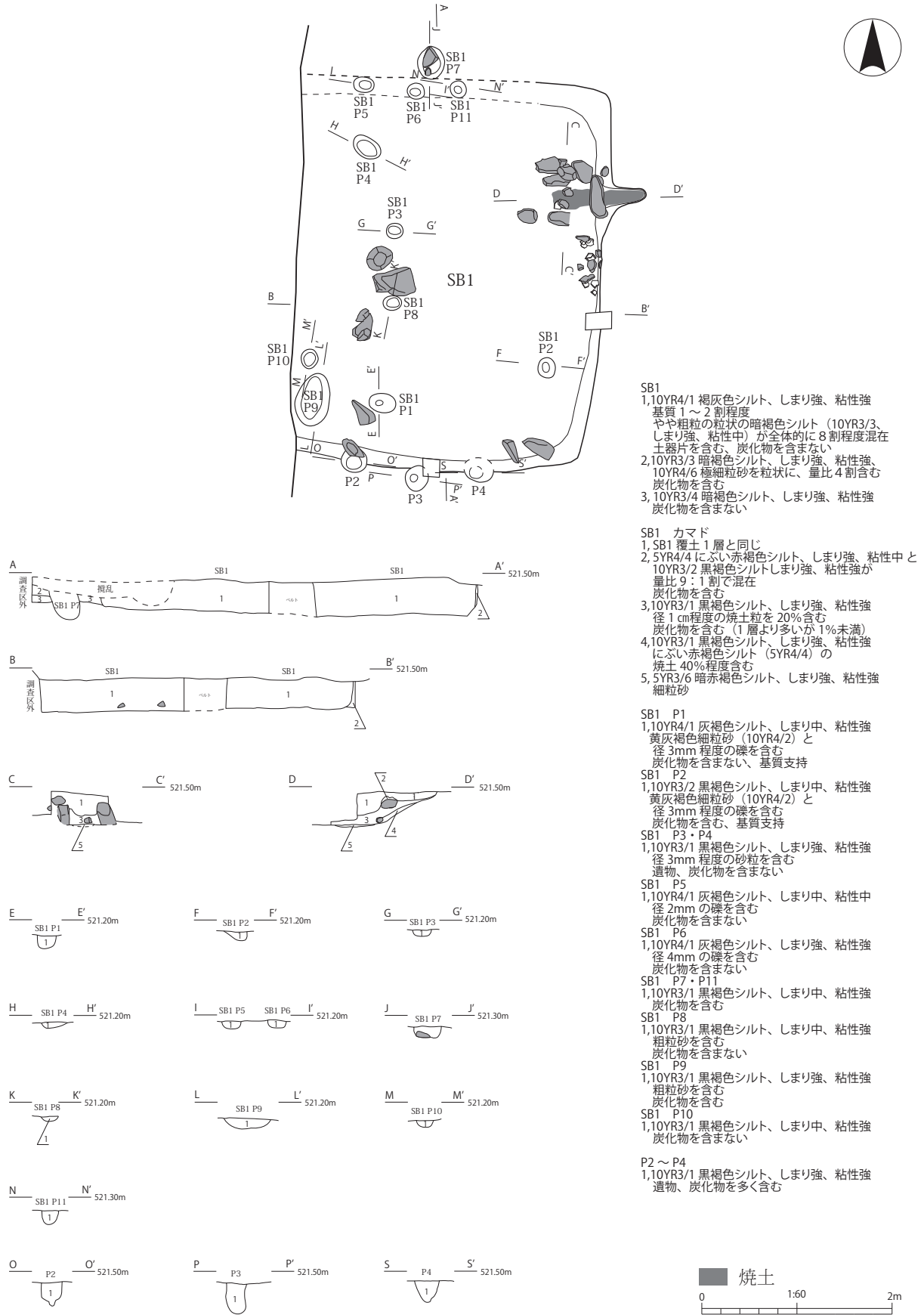
平面形・規模 東西7.7×南北0.6mで溝状を呈すが、調査区外南側に広がっているため溝状遺構であるかは確認できていない。東西軸方向はN81°Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.4mで、北壁は緩やかに立ち上がる。南壁は調査区外であるため、立ち上がりは確認出来ていない。覆土は、2層を確認した。

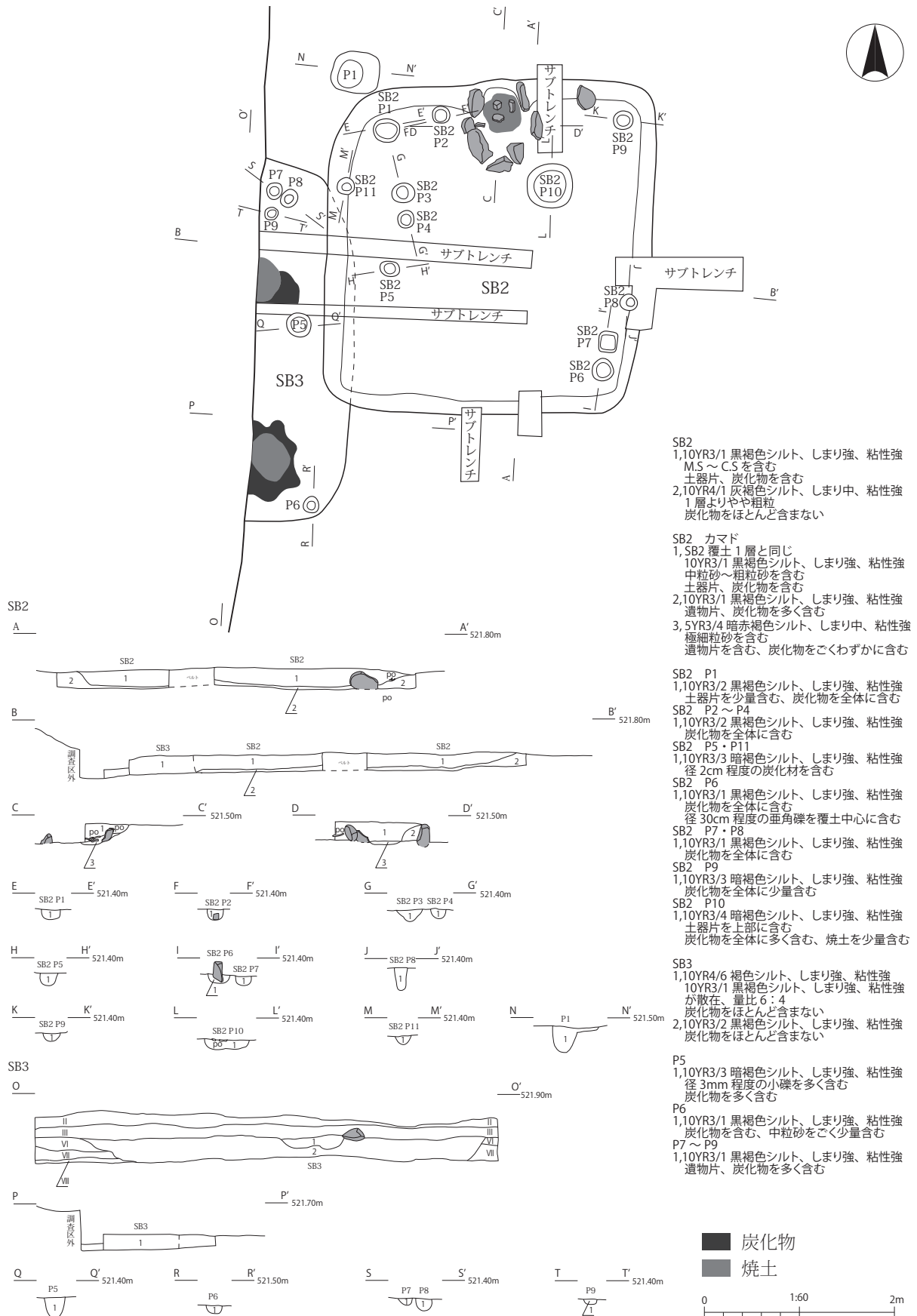
底面 遺構内へ常時浸水があったため、排水作業を継続しながら調査を行った。しかし、底面は常に浸水した状態で、精査はできなかった。このため、遺構底面でSX 1に付属する遺構は確認していない。

重複関係 SX 1西側で、SB 5を切る。また、SX 1北壁で、P32・P38と重複するが、前後関係は不明である。

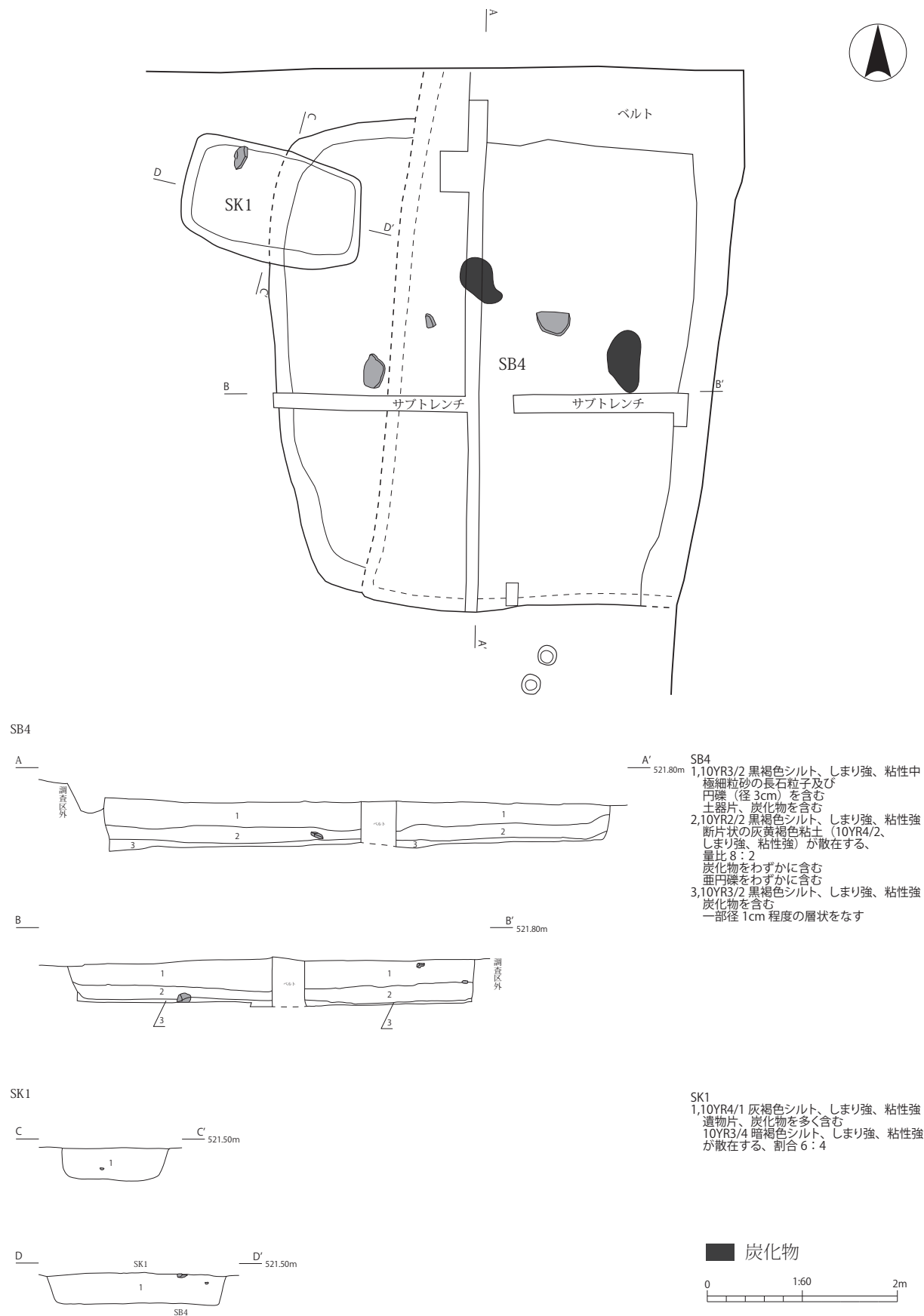
時期 出土土器類からは松本平古代10期に比定できるが、SB 1を切ることから古代12期以降の構築と考えられる。



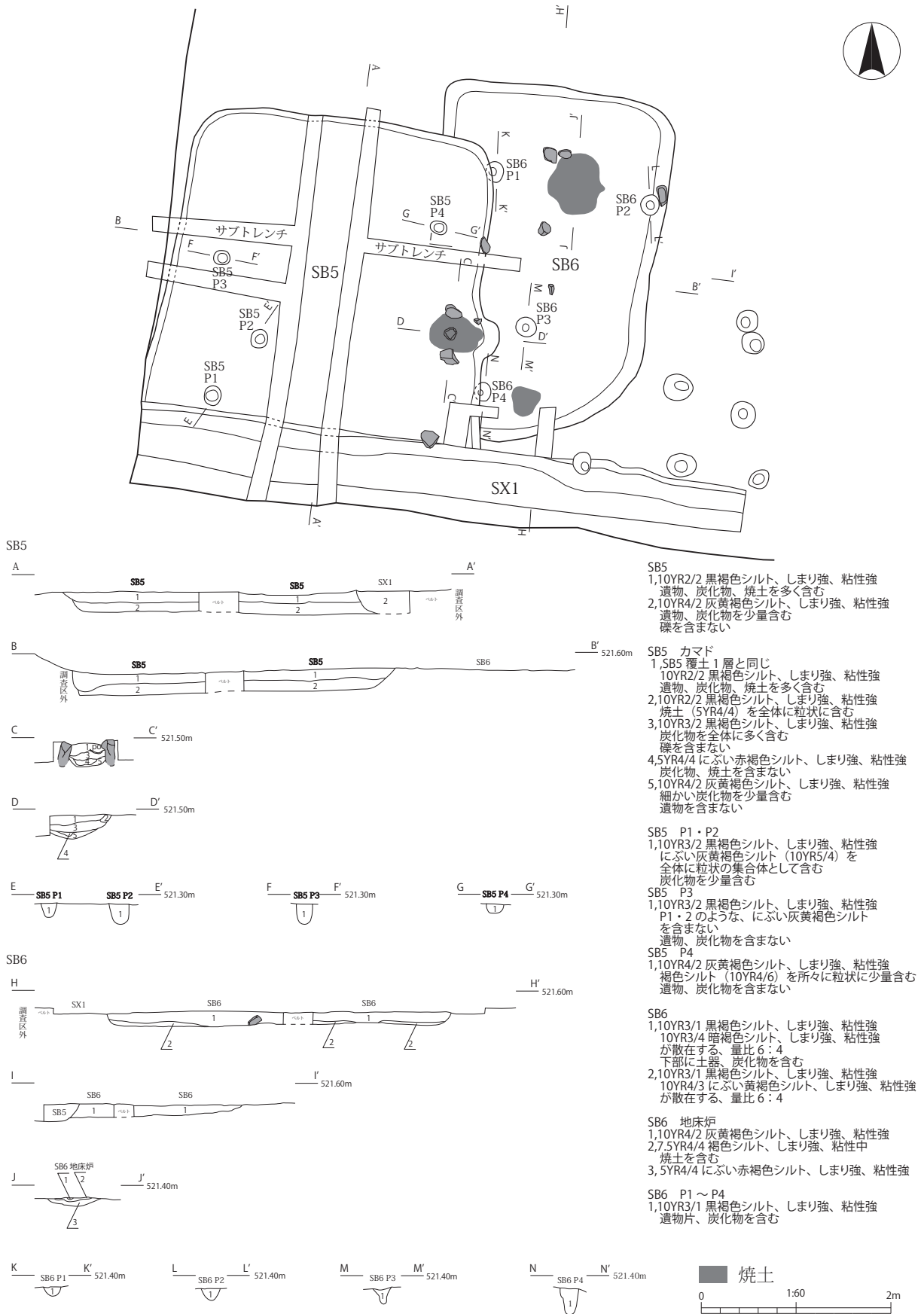
第13図 SB1



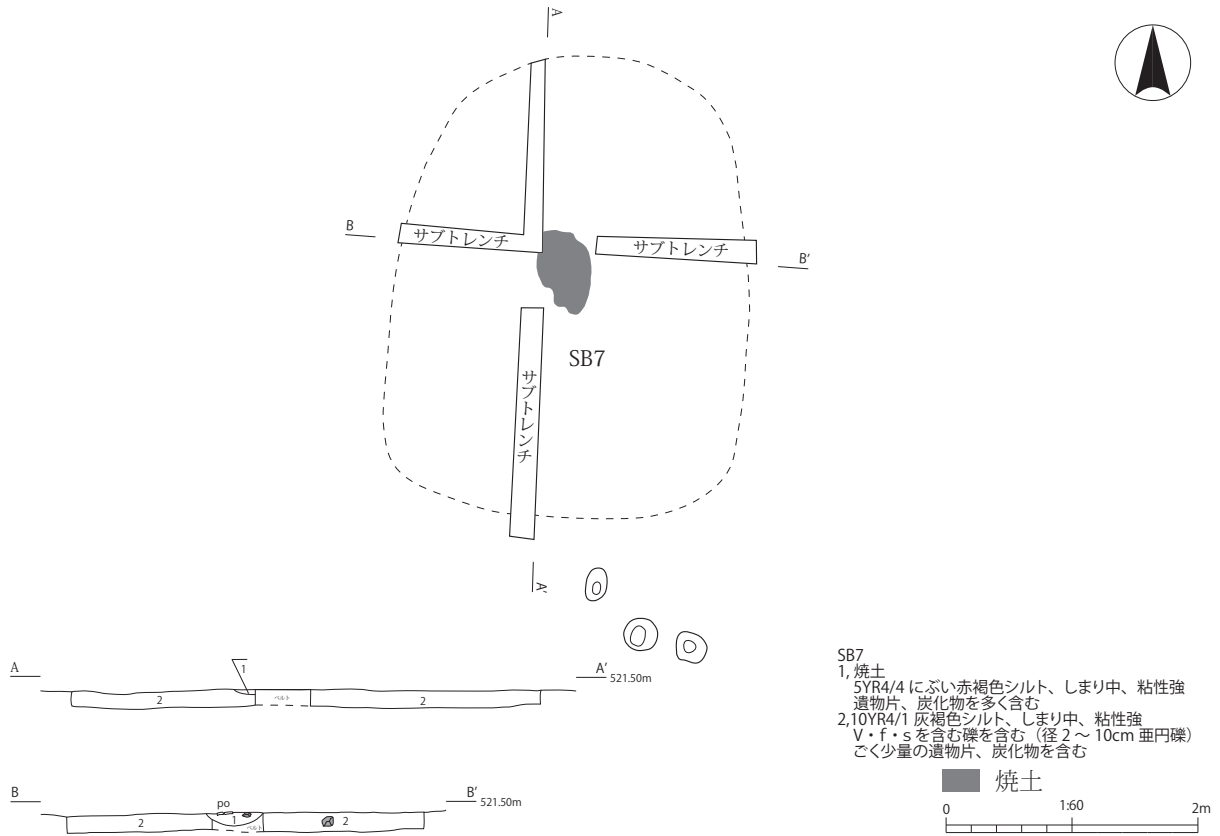
第14図 SB2・SB3



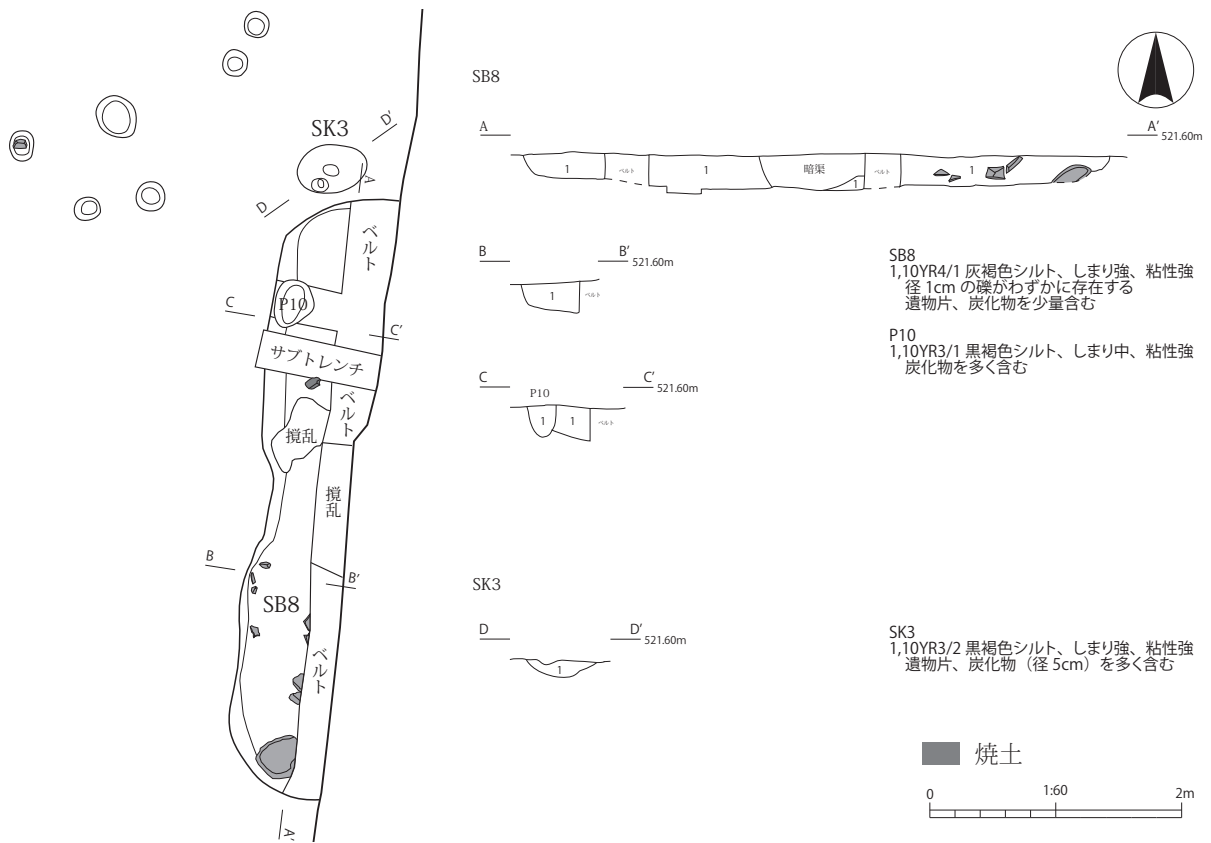
第15図 SB4・SK1



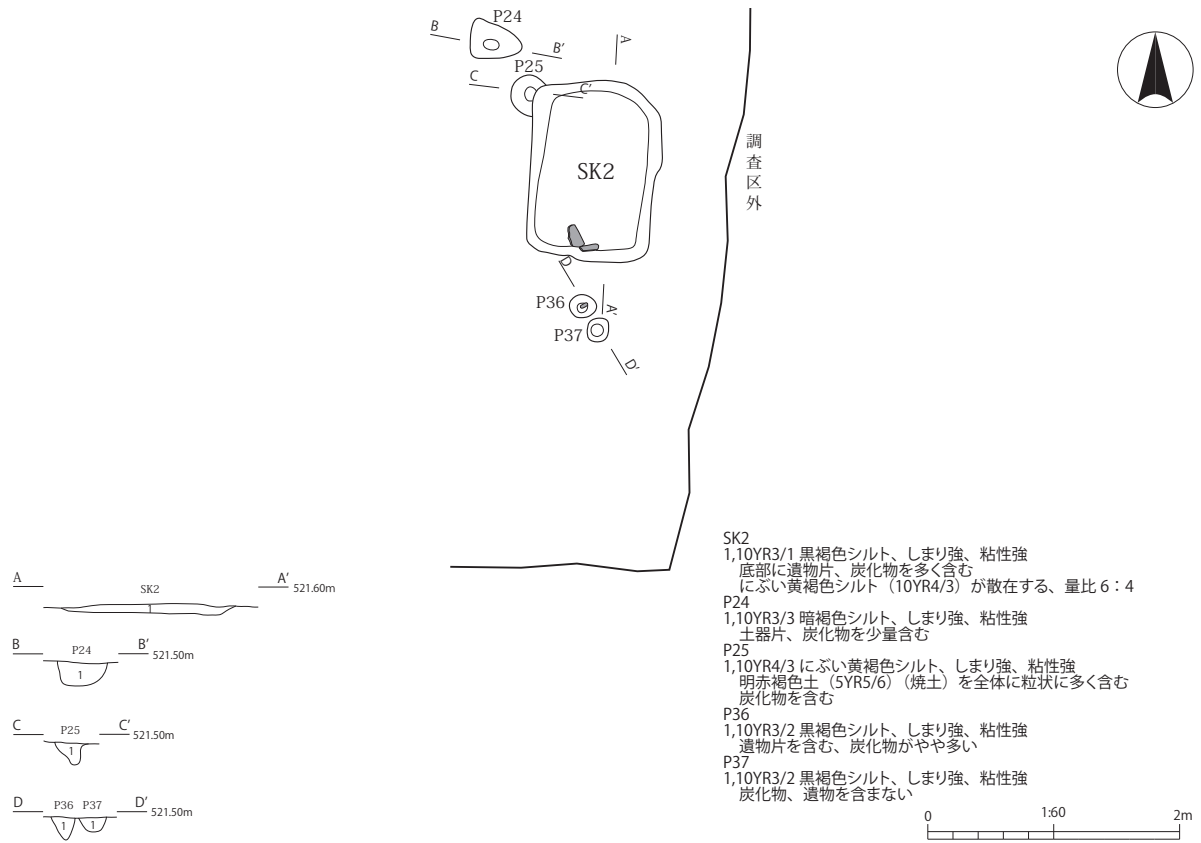
第16図 SB5・SB6



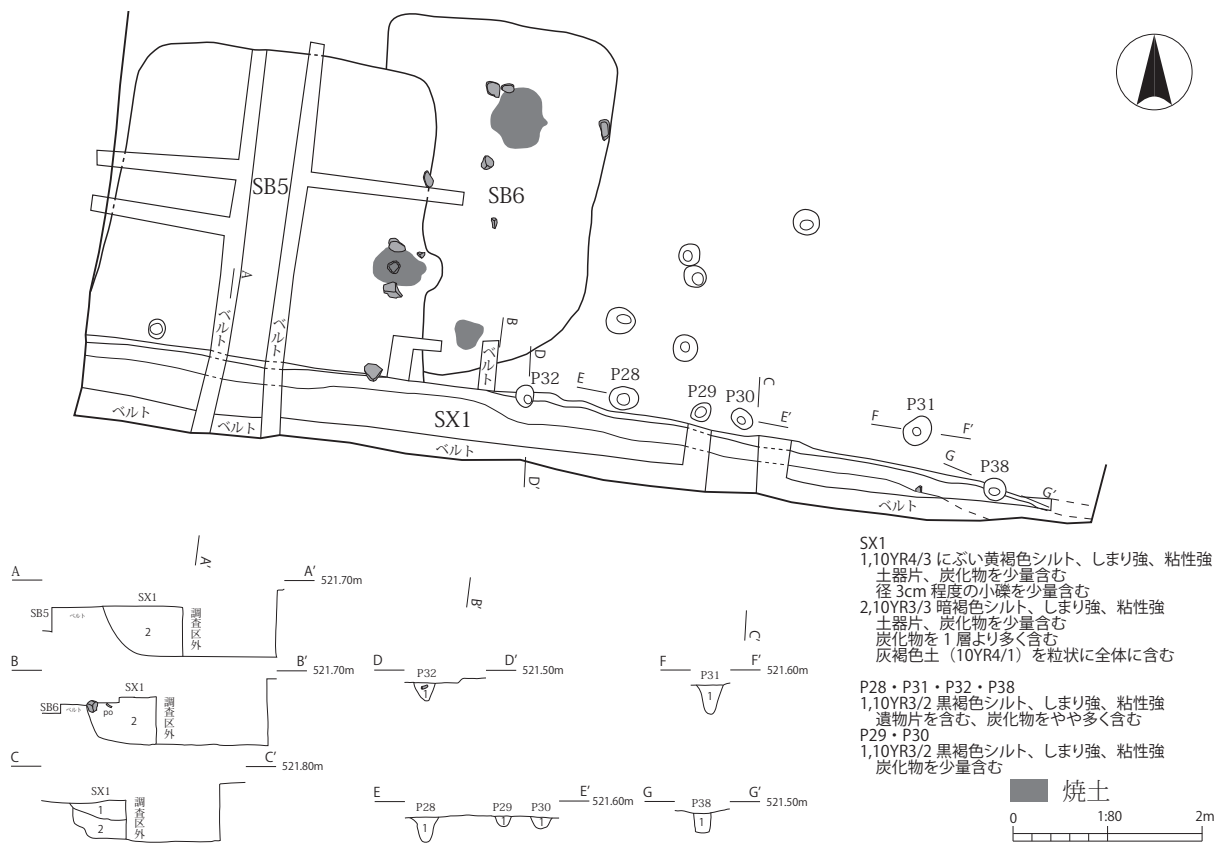
第17図 SB 7



第18図 SB 8 ・ SK 3



第19図 SK 2



第20図 SX 1

第6章 遺物

1 弥生時代の遺物

潮神明宮前遺跡第3次発掘調査では、3棟の竪穴建物跡から弥生時代の土器及びガラス小玉が出土した。以下に各資料の特徴を、遺構別に記載する。

(1) SB3

SB3出土土器は破片資料のみで、図化できるものはない。時期決定の参考になる土器片としては、横方向に櫛描直線文を多段に配し、それを縦方向にT字文が切る壺の頸部、櫛描波状文の甕、赤彩を施した壺の頸部がある。これらの特徴から、弥生時代後期に比定できる。

(2) SB4 (第24図1)

SB4出土の弥生土器は、1点を資料化した。残存部位が底部のみであるため詳細は不明であるが、胎土及び底径・厚み等から甕である可能性が高い。胎土は赤褐色で、石英、長石、雲母を多く含む。この他、図示できないが壺と考えられる小破片もある。

(3) SB6 (第24図2～14、第28図159～160)

2～4は、覆土中からの出土である。2は無文の壺で、口径が22.6cmと大きい。器面は内外面とも摩耗しており調整は観察しにくい、類例からナデ調整と推測できる。3・4は甕で、いずれも口縁部から頸部にかけて波状文を施す。3は、頸部に1条の櫛描簾状文を持ち、口縁部には粗雑な櫛描波状文を描く。4は、頸部が残存しておらず、開きの強い口縁部は単沈線で波状文を描いている。

5～14は、床面からの出土土器を掲載した。5は、椀形高坏の坏部分である。器面は内外面ともに摩耗しており、調整や赤彩の有無は不明である。器形は、類例中ではやや浅い。胎土は、明褐色である。6は高坏の脚部で、外面に赤彩を施している。7は壺の頸部で、横方向に櫛描直線文を多段に配し、それを縦方向に切るT字文を施している。8・9は壺で、同一個体の可能性が高いが接合はしない。8は、口縁部破片で内外面共に赤彩を施す。10は甕の口頸部で、開きの強い口縁と屈曲点を2箇所有する頸部が特徴である。器壁は摩耗しており、施文・調整は不明であった。11・12も甕で、胎土に砂粒を多く含む点が特徴的であり、同一個体の可能性が高い。頸部に1条の櫛描簾状文を施し、その上下にやや粗雑な櫛描波状文が展開する。体部は、やや張る器形になる。13・14は、残存部位が少なく調整も不明瞭であった。

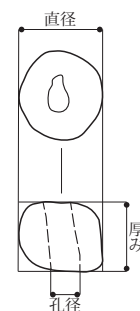
未掲載の破片資料としては、櫛描波状文をもつ甕、多段の櫛描直線文をもつ壺の頸部、赤彩を施した器種不明の小破片が若干量ある。

SB6出土弥生土器に見られる、甕の櫛描波状文の粗雑化、坏部が浅い椀形高坏の出現、壺の頸部で

のT字文の出現等の特徴から、この土器群は弥生時代後期Ⅲ～Ⅳ期に比定できる(和田1999)。

このほか、SB6からは弥生時代のガラス小玉が2点出土した(159～160)。このガラス小玉は、SB6精査中に覆土から先行して1点が出土した。このため、SB6遺構覆土を全量採取し、現場作業終了後に水洗選別を実施した。この結果、さらに1点のガラス小玉が出土し、合計2点を採取した。今回の調査区には平安時代の遺構が多く構築されており、弥生時代遺構との切り合いも考慮した点、及び潮神明宮前遺跡一帯には潮古墳群を構成する円墳が複数存在しており、未知の古墳が存在する可能性もある点から直ちに弥生時代の遺物と判断することができなかった。このため、蛍光X線分析を実施し、2点ともアルカリ珪酸塩ガラス製と判明した(第7章1)。化学組成の特徴から、弥生時代に典型的なカリガラスに属する可能性が高いことが判明し、弥生時代の遺構から出土した事実と併せて弥生時代のガラス小玉であると認定できた。

なお、松本盆地における弥生時代のガラス小玉は、^{しおじり} ^{つる} ^{みや} 塩尻市剣ノ宮遺跡(塩尻市教委2001)、^{なかぼさみ} 中挾遺跡(桐原1974、^{おおまち} ^{なかじょうぼら} 小沢1995)、^{おおまち} ^{なかじょうぼら} 大町市中城原遺跡(大町市教委1992)で見られる。



第21図 計測部位

(4) SB7 (第24図15)

SB7からは、甕の口縁部1点を資料化した。胎土に砂粒を多く含み、内外面とも摩耗が著しい。施文・調整は不明である。

(5) SX1 (第24図16)

SX1出土土器は、1点を資料化した。16は、甕の口頸部で、外面には粗雑な波状文が施されている。施文の特徴は、SB6出土の4と類似する。

2 平安時代の遺物

潮神明宮前遺跡第3次発掘調査では、5棟の竪穴建物跡及び3基の土坑から平安時代の遺物が出土した。以下に、各資料の特徴を記載する。なお、土器・施釉陶器の記載については^{よしだかわにし}吉田川西遺跡報告書(長野県埋文セ1989)及び中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見(小平1990)を基本に、以下のとおり分類した。金属製品の記載については、吉田川西遺跡報告書を主として参考にした。

土器の種別は、中央自動車道関連埋蔵文化財発掘調査の所見に拠り、土師器、黒色土器A(内面にミガキ及び黒色処理を施す)、黒色土器B(内外両面にミガキ及び黒色処理を施す)、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器に大別した。また、土器・施釉陶器の種類は用途に応じて、食膳具、煮炊具、貯蔵具に分類し、器形に応じて器種を設定した(第4表)。なお、実際の分類に際して、口縁部付近しか残存していない食膳具で器種を坏と分類した破片資料に塊が含まれている可能性がある。

土器以外には、金属製品(鉄製品)、石製品が出土した。これらについては、個別に記載する。

第4表 器種分類

種類	種別	器種	説明
食膳具	土師器	坏A	ロクロ成形で体部から口縁部にかけて直線的に開く。
		埴A	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。高台は長く外傾する傾向がある。
		埴B	体部下半を大きく膨らませ、器高が比較的高く深い。高台は短く立ち上がる。
		埴	埴のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
		皿A	ロクロ成形の扁平な土器で、高台を有しないもの。
	黒色土器A	坏A	ロクロ成形で体部から口縁部にかけて直線的に開く。
		埴A	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。高台は長く外傾する傾向がある。
		埴B	体部下半を大きく膨らませ、器高が比較的高く深い。高台は短く立ち上がる。
		埴	埴のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
		埴C	高台を有する小埴、口径11cm以下、器高5cm以下。
	黒色土器B	埴B	体部下半を大きく膨らませ、器高が比較的高く深い。高台は短く立ち上がる。
		埴C	高台を有する小埴、口径11cm以下、器高5cm以下。
		鉢	高台を持たず、器高が比較的高く深い。
	灰釉陶器	埴A	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。高台は長く外傾する傾向がある。
		埴B	体部下半を大きく膨らませ、器高が比較的高く深い。
		埴	埴のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
		皿A	ロクロ成形で、直線的に伸びる扁平な体部をもつ。
		皿D	口縁端部を折り曲げる、いわゆる折縁皿。
	緑釉陶器	埴(D類)	青灰色の硬質の胎土で、器表にはヘラミガキを残さず、濃淡の強いやや濁りのある緑色を呈する。
	煮炊具	土師器	甕
小型甕			小型甕のうち、残存状況が悪く詳細な形態が不明確なもの。
小型甕D			ロクロ調整の小型甕で体部にカキ目またはロクロ目を明瞭に残す。底部に糸切り痕を残す。
小型甕E			非ロクロ調整の小型甕で、器面を粗くナデ調整で仕上げる。
貯蔵具	須恵器	甕	主として卵型の体部を持ち、外面にタタキ目、内面は当て具痕またはナデ調整を観察できる。
	灰釉陶器	壺	灰釉陶器のうち、壺形の体部を持つもの。残存状況が悪く詳細な形態は不明確である。

(1) SB1 (第25図17~36、第28図156~157)

SB1出土土器は、20点を資料化した。17~24が覆土出土、25~36が床面及びカマド付近出土である。覆土出土資料のうち、21は黒色土器Bで暗文が施されている。22は灰釉陶器の埴Aで、口縁形態から大原2号窯式と考えられる。23は、灰釉陶器の埴Bである。高台は三日月高台から変化し、外側で緩やかな稜をもって接地する形態をとる。また、釉は漬け掛けで、本資料は虎溪山1号窯式と考えられる。24は非ロクロ成形の小型甕Eで、頸部は緩く外反し、外面はナデ調整、内面はナデ調整後にハケメ調整を施す。

25・26は、土師器坏Aである。このうち、25は付着黒色物の自然科学分析を実施した(第7章2・4)(試料No.4:PLD-37546)。27は土師器埴Aで、高台の貼り付け痕跡が明瞭である。28~30は、黒色土器Aの埴とした。28は、口径が19.6cmと大きい。この資料の外面付着炭化物で自然科学分析を実施した(第7章2)(試料No.3:PLD-37545)。31は、黒色土器Bである。黒色土器Bは、高台を有する碗形を呈するものが多いが、31は厚めの底部をナデ調整のみで仕上げる鉢形の形態をとる。32・33は同一個体で、胎土に砂粒を多く含み雲母が目立つ。34~36は、須恵器甕の体部破片である。34は、大きさと形態から猿面硯への転用の可能性があるため、丁寧に観察したが硯として使用された痕跡は確認できていない。

灰釉陶器の窯式と黒色土器Bの出現が古代12～15期であることから、SB1の廃絶時期は松本平古代12期と考えられる。

SB1出土金属製品は、第28図に示した。156は、鉄鎌である。折り返しが手前にくるように据えると、刃部が右側に向くため、左利き用の鎌と考えられる。切先は欠損しており、刃部残存長は7.0cm、基部が5.5cm、最大幅は刃部中央付近で2.2cm、基部最大幅は2.0cmを測る。このため、基部から刃部にかけて緩やかに増幅する形態となっており、刃部と基部の区分は不明瞭である。刃部中央付近で、棟側及び刃側の弯曲が急になる。基部の柄に対する角度は155°、刃部の柄に対する角度は135°となっている。基部の下端隅は角丸を呈し、折り返し部の幅は約2.2cmで端部全体を折り返す。以上のような形態的特徴をもつ鉄鎌は、吉田川西遺跡の鎌類型V類に分類でき、10世紀第4四半紀～11世紀初頭に比定できる。157は、断面四角形で中空の鉄製品である。両端が欠損しており、中央部分のみが残存しているため全体の形状は不明である。断面は、1辺が0.6～0.7cmでほぼ正方形を呈し、一枚の鉄板状の素材を折り曲げて成形したように継ぎ目がある。

(2) SB2 (第25図37～第26図106、第28図158)

第5章で記載したとおり、SB2のカマド付近からは多量の食器類が出土している。この報告では、70点を資料化した。土器類は出土層位を記録したが、カマド付近は土器片の重複が著しく、図示できた土器類はSB3との重複分も併せて、一括資料として扱う。種別としては、土師器、黒色土器A、緑釉陶器で構成される(第5表)。このうち土師器が59点(84.3%)を占め、次いで黒色土器Aが多い。須恵器、灰釉陶器、黒色土器Bは出土していない。

器種の構成は、第6表のとおりである。土師器では、坏Aが41点(58.6%)、埴類が16点(22.9%)と大半を占める。土師器埴では、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形の埴Aのみ認められ、埴Bはない。黒色土器Aでは、坏Aが5点(7.1%)で多く、次いで埴Bが3点(4.3%)となる。このことから、土師器及び黒色土器Aの両方で坏Aが最多で、器種の組成割合では卓越している。また、土師器及び黒色土器Aを合算すると、埴類は21点で、全体の約3割を占める。

次に、口径と器高が計測できた個体について法量分布図を作成した(第22図)。土師器坏Aは11点で、口径は11.0～13.0cm、器高は2.9～4.4cmに分布する。土師器埴Aは6点で、口径は12.8～14.8cm、器高は4.6～5.8cmに分布する。黒色土器A坏Aは3点で、口径は14.0～15.8cm、器高は3.7～4.9cmに分布する。黒色土器A埴Bは3点で、口径は12.4～14.4cm、器高は5.1～6.3cmに分布する。散布図上では、これら4器種の法量分布は明確に区別でき、土師器坏Aが口

第5表 SB2出土土器の種別

種類	点数	割合
黒色土器A	10	14.3%
土師器	59	84.3%
緑釉陶器	1	1.4%
総計	70	100.0%

第6表 SB2出土土器の器種

器種	点数	割合
土師器坏A	41	58.6%
土師器埴	7	10.0%
土師器埴A	9	12.9%
土師器小型甕D	1	1.4%
土師器甕	1	1.4%
黒色土器A坏A	5	7.1%
黒色土器A埴	1	1.4%
黒色土器A埴A	1	1.4%
黒色土器A埴B	3	4.3%
緑釉陶器埴	1	1.4%
総計	70	99.9%

第6章 遺物

径・器高ともに小さい。土師器壺A、黒色土器A坏A、黒色土器A壺Bは、散布図上で正の相関関係をもち、口径では黒色土器A坏Aが大きく、黒色土器A壺Bが小さい。また、器高では黒色土器A壺Bが大きく、黒色土器A坏Aが小さい。口径及び器高のいずれにおいても、土師器壺Aは、これら2者の中間に位置する。

以上のように、SB2では土器類種別の組成における土師器の増加が特徴として

挙げられる。土師器坏Aの法量分布では、口径11.0～13.6cm、器高2.9～3.8cmの南栗遺跡SB616段階に相当し、松本平古代9期以降に比定できる。ただし、新しい要素として黒色土器A壺Bも3点出土している。これは吉田川西遺跡ではSB52段階が初出とされ、松本平古代11期以降に見られる（長野県埋文セ1989）。これらの要素からSB2出土資料は若干の年代幅をもつが、SB2の廃絶年代は松本平古代11期と推定できる。

このほか、SB2からは砥石が出土した（158）。下端部を折損しているため、残存部分を計測すると残存長8.2cm、幅5.9cm、厚み2.3cmで、角は丸みを帯びているが直方体を呈する。欠損部分の破断面以外の5面は使用した痕跡があり、面的な研磨の痕跡以外にも、筋状に深い使用痕跡が残されている。

(3) SB3（第27図107～108）

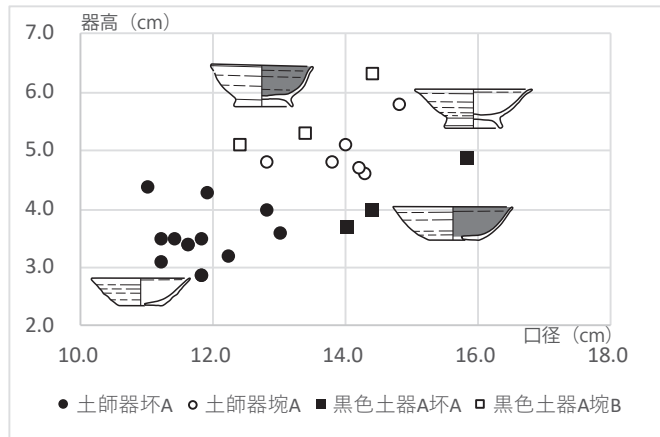
SB3出土土器は、2点を資料化した。SB3は、遺構の特徴及び出土遺物のうち弥生土器が大半を占める状況から、弥生時代の遺構と判断した。このため、ここで資料化した2点はSB3を切るSB2に帰属する可能性が極めて高いと整理段階で判断した。107は土師器坏A、108は緑釉陶器壺の底部付近破片である。いずれも、前述のSB2出土一括資料と同等の内容であり、整合的である。

(4) SB4（第27図109～110）

SB4出土の平安時代の土器類は、2点を資料化した。2点とも、覆土からの出土である。109は、灰釉陶器壺の底部である。釉は内面のみで観察でき、漬け掛けである。外面には、高台貼り付け痕跡が残る。110は、須恵器甕で、内面は当て具痕跡を消すようにナデ調整が施される。

(5) SB5（第27図111～132）

SB5出土土器類は、22点を資料化した。種別ごとの組成は、土師器15点（68.1%）、黒色土器A5点（22.7%）、黒色土器B1点（4.5%）、灰釉陶器1点（4.5%）からなる。器種の構成は第7表のとおりで、土師器坏Aが10点（45.5%）を占める。土師器壺類は5点（22.7%）で、黒色土器A壺類4点（18.1%）とほぼ同じ割合といえる。特徴的な点は、土師器、黒色土器ともに、壺Bが出現していることである。



第22図 SB2出土土器法量散布図

また、黒色土器A、黒色土器Bでは、小型の埴となる埴C（132）も出土している。灰釉陶器では、皿（124）が1点出土した。口縁部が残存していないため口縁形態は不明であるが、高台の接地面をやや外側にとっており三日月高台からの型式変化の途上で理解できるため、光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式と捉えられる。118は、土師器埴Aで、底部中央に1箇所、高台側面に約90°ごとに1箇所ずつ計4箇所の穿孔がある。これらの穿孔は、土師器の焼成前に施されている。この資料の用途は不明確だが、類例では底部中央の穿孔部に芯棒をたてて灯明用の器具として使用したと考えられるものがある。121・122は、同一個体の可能性が極めて高い。薄手の黒色土器A埴Bで、体部上半で垂直に立ち上がり口縁端部がやや開く。全体的に丁寧なつくりで、内面には横方向のミガキ調整を観察できた。

次に、口径と器高が計測できた個体8点について、法量分布図を作成した（第23図）。土師器埴Aは6点で、口径は11.0～14.1cm、器高は3.0～4.1cmに分布する。また、黒色土器A埴Aは、口径12.0cm、器高3.0cm、黒色土器B埴Cは、口径11.0cm、器高5.0cmである。SB2資料で得られた結果と同様に、土師器埴Aの法量が他の器種よりも小さい傾向が読み取れるが、黒色土器埴Aは土師器埴Aに近いと法量であるとも解釈できる。

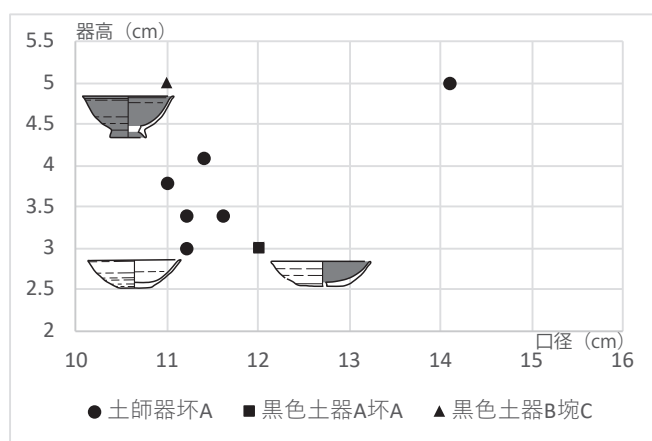
以上のとおり、SB5出土土器は土師器埴Aの組成する割合が高い点、口径及び器高の法量分布が南栗遺跡SB583段階に相当する点から、松本平古代10期以降における。加えて、黒色土器A埴Bは古代11期の出現であり、黒色土器Bは古代12～15期に存在することから、SB5の廃絶時期は古代12期に比定できる。

(6) SB8（第27図133～136）

SB8出土土器は、4点を資料化した。133・134は、土師器皿Aである。いずれも黒斑を有し、胎土が乳褐灰色である特徴から、他の土師器と区別できる。器形は、体部中央付近に緩い稜をもち、口縁部がやや開き気味となる。134は、この稜で強く屈曲する。135は、黒色土器A埴Bで内面に放射状のミガキ調整を施している。136は、土師器小型甕Dである。ロクロ成形・調整の後、器面をハケ目調整している。

第7表 SB5出土土器の器種

器種	点数	割合
土師器埴A	10	45.5%
土師器埴	2	9.1%
土師器埴A	2	9.1%
土師器埴B	1	4.5%
黒色土器A埴A	1	4.5%
黒色土器A埴	1	4.5%
黒色土器A埴B	2	9.1%
黒色土器A埴C	1	4.5%
黒色土器B埴C	1	4.5%
灰釉陶器皿	1	4.5%
総計	22	100.0%



第23図 SB5出土土器法量散布図

第6章 遺物

SB8出土土器について、皿Aの口径が大きく口縁端部の面取りも丁寧である特徴が、吉田川西遺跡SB32段階に相当する。また、黒色土器A壙Bは古代11期以降に見られる傾向を加えると、SB8の廃絶時期は松本平古代13期と考えられる。

(7) SK1 (第27図137)

SK1出土土器は、土師器坏Aを1点資料化した。底部は回転糸切りで、内面は摩耗が著しい。

(8) SK3 (第27図138～144)

SK3出土土器は、7点を資料化した。138は坏Aとしたが、やや開き気味の口縁形態であるため壙の可能性もある。139・140は、坏Aの底部である。141・142は、土師器壙Aとした。142は、形態的には壙Aと壙Bの中間的な要素をもつ。体部下半の膨らみは壙Bの要素であるが、口縁部の開き方と高台の開き方は壙Aの要素で、法量的にも壙Aに近い^{ため}壙Aと分類した。143は、土師器壙の底部で、外側に開く形態の高台は壙Aの可能性が高い。144は、黒色土器B壙Bである。体部下半は丸みをおびて膨らむ。

以上のような特徴から、SK3出土土器の組成は、土師器壙の存在や黒色土器Bの出現などがSB5に類似する。したがって、SK3の廃絶時期もSB5と同時期の松本平古代12期と考えられる。

(9) SX1 (第28図145～148)

SX1出土土器は、4点を資料化した。146は灰釉陶器壙で、釉は漬け掛けである。口縁形態から、大原2号窯式相当と推定できる。147・148は、甲斐型の土師器甕である。口縁は粘土貼付けによって直角に近く外折する。以上の様相から、SX1出土土器は松本平古代10期頃と考えられるが、SX1がSB1を切るため、SX1の構築は12期以降と考えられる。

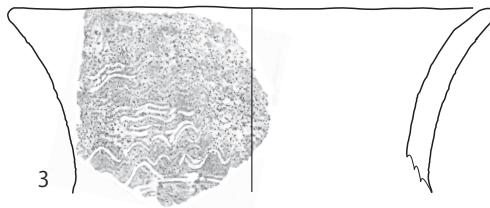
(10) 遺構外 (第28図149～153)

遺構外出土土器は、5点を資料化した。151は灰釉陶器皿Dで、見込に平滑な使用痕が見られるため転用硯と考えられる。皿Dは、東濃産では大原2号窯式以降に見られ、虎溪山1号窯式で増加するとされる(齊藤1994)。吉田川西遺跡では、SB32段階にわずかに見られる(長野県埋文セ1989)。153は、灰釉陶器の突帯付短頸壺である。頸部と体部の境界に断面台形の突帯を有し、つくりは丁寧である。地之目遺跡^{じのめ}に完形品の類例がある(千曲市教委2012)。

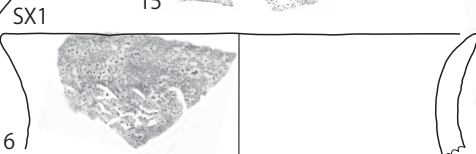
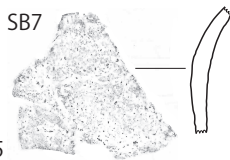
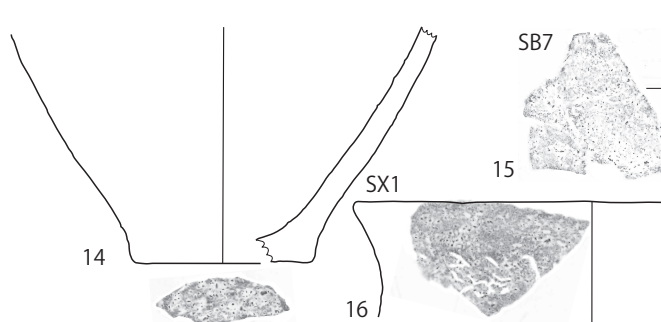
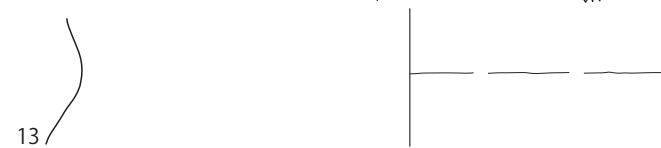
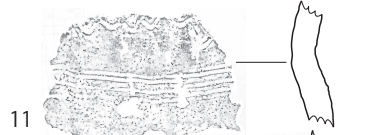
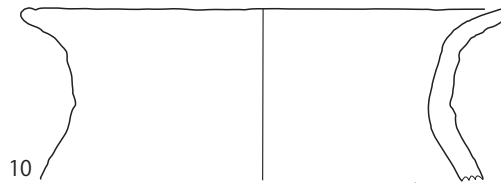
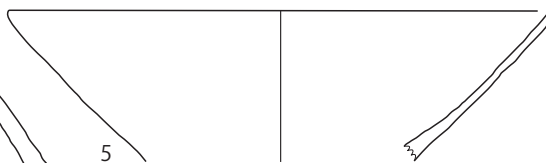
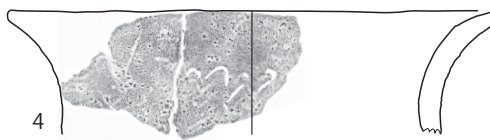
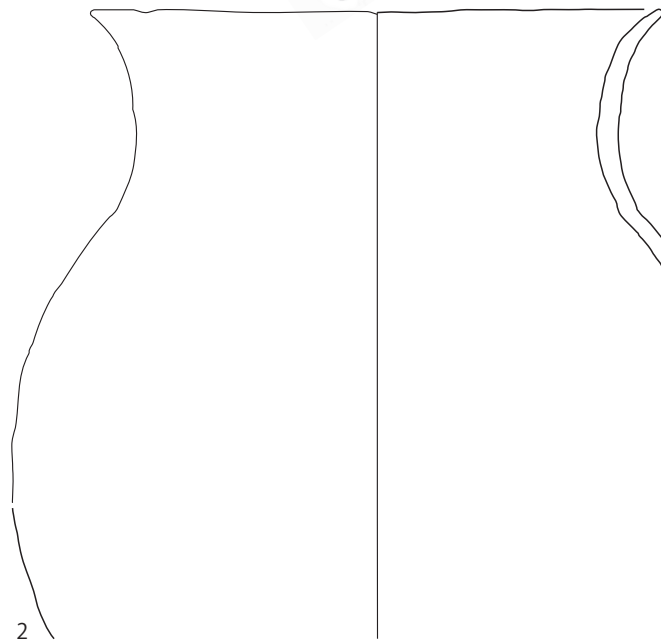
3 中世の遺物

今回の調査では、IV層上面での遺構検出時に、中世の遺物が数点出土した。このうち、資料化できたものを2点掲載する(第28図154～155)。154は、古瀬戸様式の壺形合子蓋である。上部には全面的に釉がかかっており、ロクロで成形され、回転糸切の痕跡が明瞭に残る。最大径は5.1cm、高さは1.3cmを測る。155は、内耳鍋の破片である。耳部分は残存しておらず、外面には炭化物が付着している。

弥生時代の土器
SB4



SB6

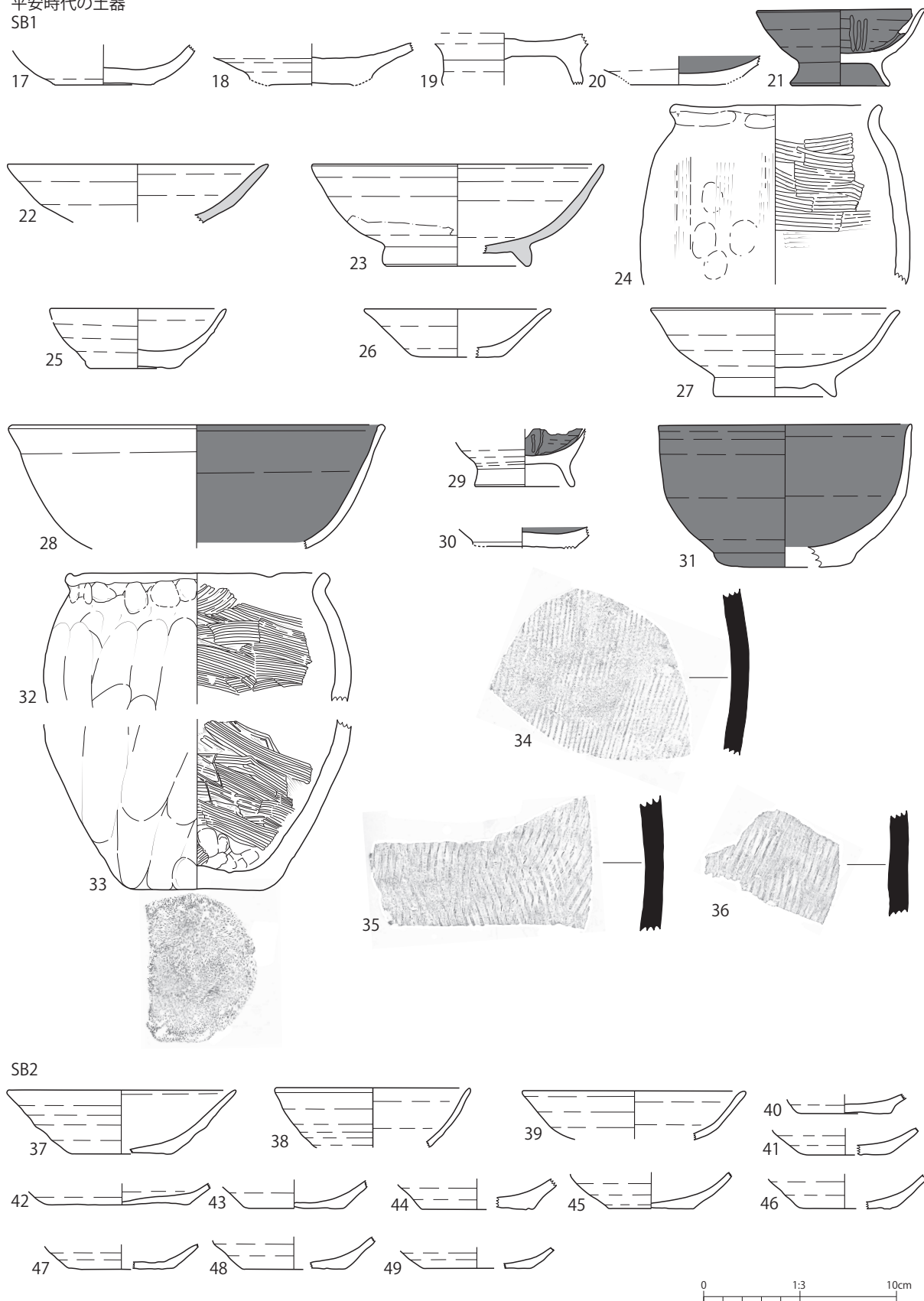


0 1:3 10cm

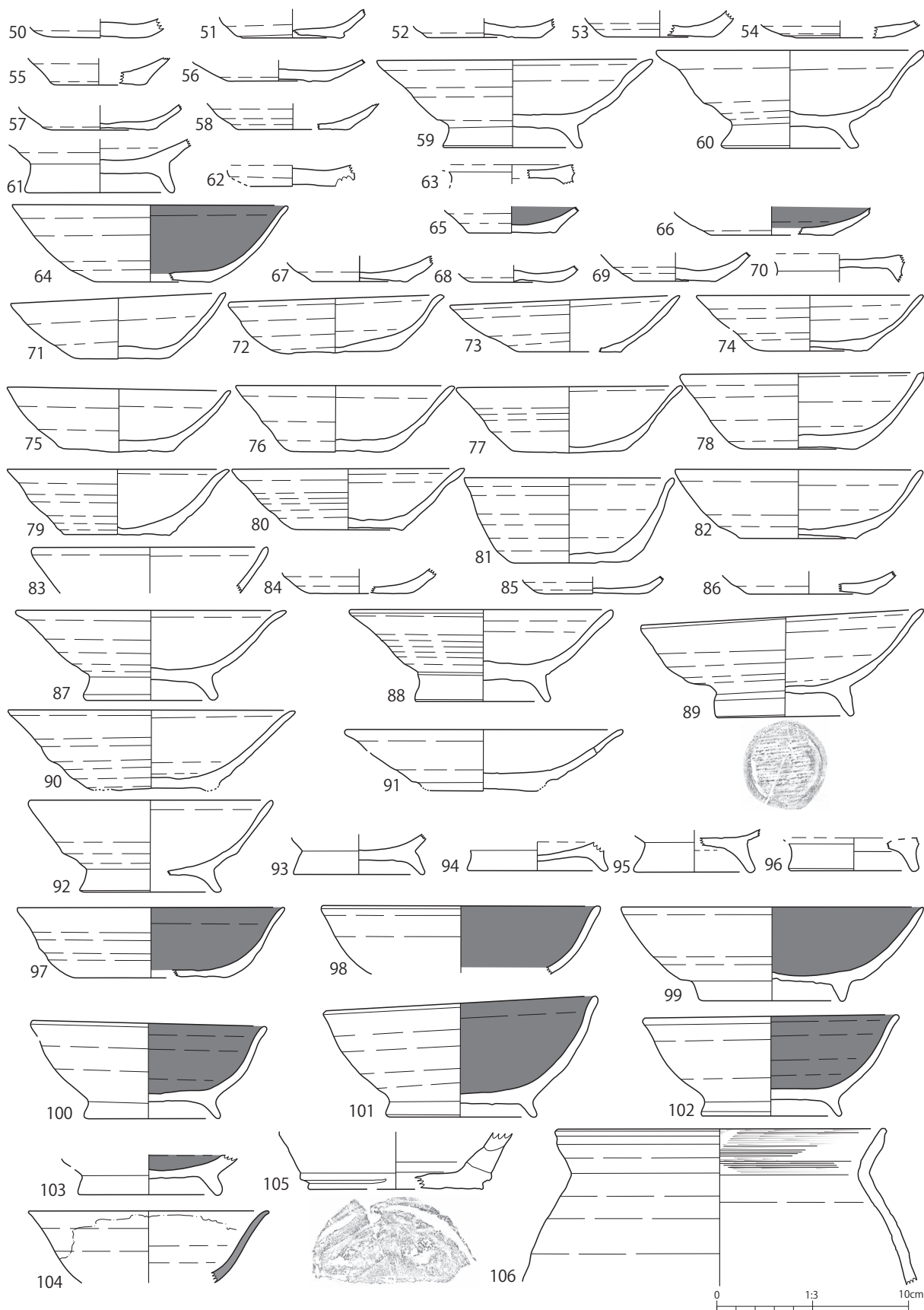
第24図 弥生時代の土器

第6章 遺物

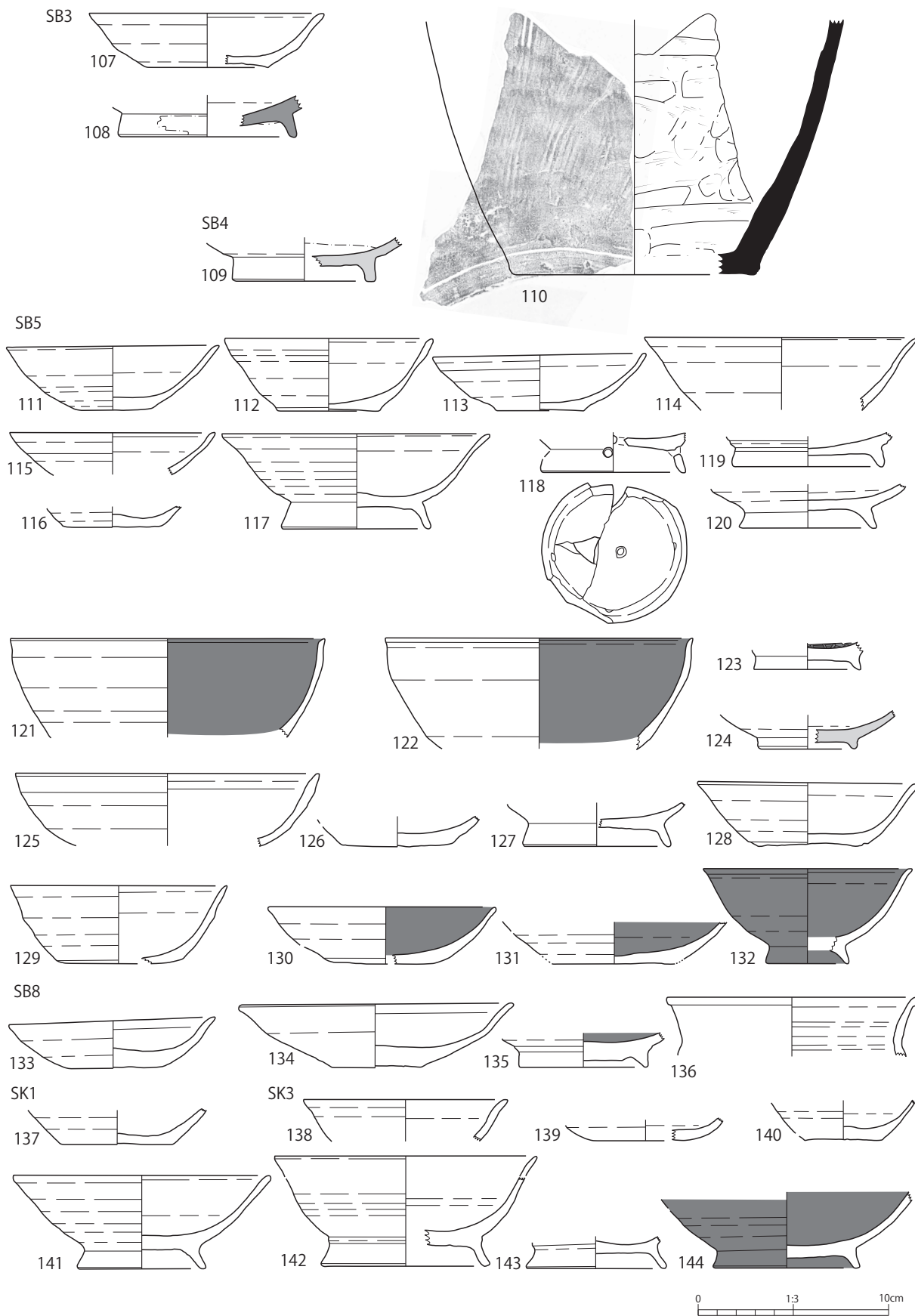
平安時代の土器
SB1



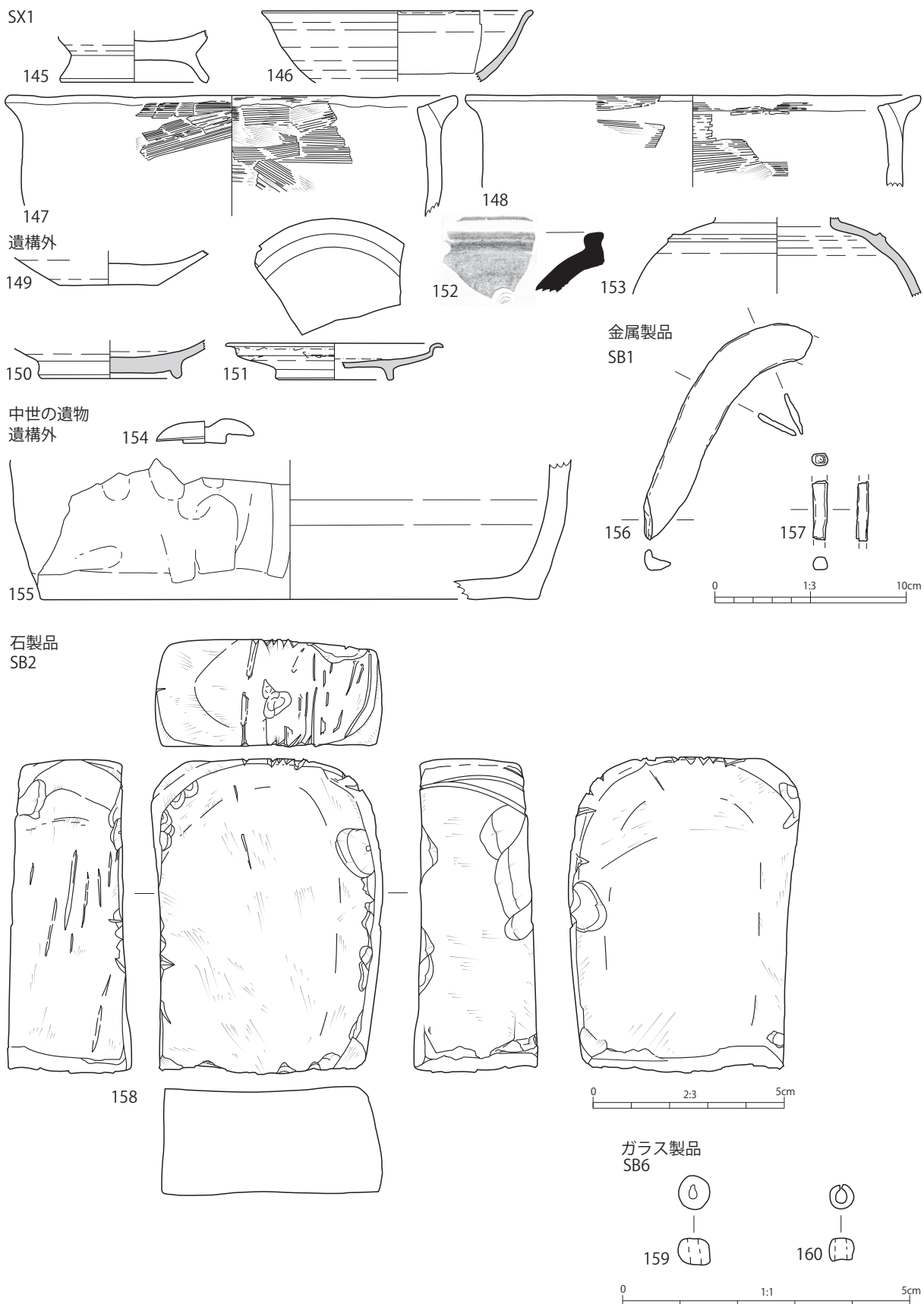
第25図 平安時代の土器 1



第26図 平安時代の土器 2



第27図 平安時代の土器 3



第28図 平安時代の土器4・中世の遺物・金属製品・石製品・ガラス製品

第6章 遺物

第8表 弥生時代の土器観察表

No.	遺物台帳No.	遺構名	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
													外面	内面	底部
1		SB 4	覆土1層	弥生土器	甕	底部	不明	不明	12.9	底部	11.0	(3.2)	横ナデ	不明	不明
2	33・34	SB 6	覆土1層	弥生土器	壺	口縁部～ 体部下半	22.6	不明	28.8	体部	不明	(25.0)	不明	ナデ	不明
3		SB 6	覆土1層	弥生土器	甕	口縁部～ 頸部	19.4	不明	19.4	口縁部	不明	(7.3)	ナデ	横ナデ	不明
4		SB 6	覆土2層	弥生土器	甕	口縁部～ 頸部	19.5	不明	19.5	口縁部	不明	(4.9)	ナデ	横ナデ	不明
5	43	SB 6	床面	弥生土器	高坏	口縁部	21.4	—	21.4	口縁部	不明	(6.0)	不明	不明	不明
6	41	SB 6	床面	弥生土器	高坏	脚部	不明	—	5.5	脚部	不明	(2.7)	ナデ+ミガキ+赤彩	粗いナデ	不明
7	47	SB 6	床面	弥生土器	壺	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	櫛描文	摩耗	不明
8	42	SB 6	床面	弥生土器	壺	体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+赤彩	ナデ+赤彩	不明
9	42	SB 6	床面	弥生土器	壺	頸部	不明	16.8	18.2	頸部	不明	(5.8)	ナデ+ミガキ+赤彩	ナデ	不明
10	47	SB 6	床面	弥生土器	壺	口縁部～ 頸部	19.2	15.0	19.2	(口縁部)	不明	(6.8)	ナデ	不明	不明
11	44	SB 6	床面	弥生土器	甕	頸部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ+櫛描文	ナデ	不明
12	33・45	SB 6	床面	弥生土器	甕	頸部～胴 部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	櫛描文	ナデ	不明
13	42	SB 6	床面	弥生土器	甕	頸部～体 部上半	不明	不明	29	頸部	不明	(5.5)	ナデ	ナデ	不明
14	49	SB 6	床面	弥生土器	不明	体部下半 ～底部	不明	不明	16.9	体部	7.0	(9.4)	ナデ	ナデ	ナデ
15	73	SB 7	覆土1層	弥生土器	甕	口縁部～ 体部上半	不明	不明	不明	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明
16		SX 1	覆土	弥生土器	甕	口縁部～ 頸部	19.0	不明	19.0	口縁部	不明	(5.0)	ナデ	横ナデ	不明

() は残存している部分の量。

第9表 平安時代の土器観察表

No.	遺物台帳No.	遺構名	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
													外面	内面	底部
17		SB 1	覆土	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	9.5	(体部)	5.2	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
18		SB 1	覆土	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	10.4	(体部)	4.4	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
19	12	SB 1	覆土1層	土師器	坏	体部～底部	不明	—	8.0	(体部)	7.4	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
20		SB 1	覆土1層	黒色土器A	坏	体部～底部	不明	—	8.2	(体部)	5.0	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り
21	32	SB 1	覆土1層	黒色土器B	坏C	口縁部～底 部	8.8	—	8.8	口縁部	5.2	4.0	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	静止糸切り
22		SB 1	覆土1層	灰釉陶器	坏A	口縁部～体 部	13.6	—	13.6	口縁部	不明	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
23	8	SB 1	覆土1層	灰釉陶器	坏B	口縁部～底 部	15.2	—	15.2	(口縁部)	7.6	5.3	ロクロナデ+灰 釉	ロクロナデ+灰 釉	回転糸切り
24		SB 1	覆土1層	土師器	小型甕E	口縁部～体 部	11.0	—	11.0	口縁部	不明	(9.3)	ナデ+指頭圧痕	ナデ+ハケメ	不明
25	36	SB 1	カマド付 近	土師器	坏A	口縁部～底 部	9.2	—	9.2	(口縁部)	4.7	3.1	ロクロナデ+回 転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転糸切り
26		SB 1	カマド	土師器	坏A	口縁部～底 部	9.8	—	9.8	口縁部	4.6	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
27	37	SB 1	カマド付 近	土師器	坏A	口縁部～底 部(高台)	13.0	—	13.0	(口縁部)	6.4	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+ 工具ナデ
28	38	SB 1	カマド付 近	黒色土器A	坏B	口縁部～体 部	19.6	—	19.6	(口縁部)	不明	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	不明
29	17	SB 1	床面	黒色土器A	坏C	体部～底部	不明	—	6.7	(体部)	5.2	(3.0)	ロクロナデ+ミ ガキ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	静止糸切り
30	16	SB 1	床面	黒色土器A	坏	底部	不明	—	不明	(底部)	5.3	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り
31	39	SB 1	カマド付 近	黒色土器B	鉢	口縁部～底 部	13.2	—	13.2	(口縁部)	7.0	7.4	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	静止糸切り+ 工具ナデ
32	21	SB 1	床面	土師器	小型甕E	口縁部～体 部	13.6	13.4	16.0	(体部)	不明	(6.8)	ナデ+指頭圧痕	ナデ+ハケメ	不明
33	20	SB 1	床面	土師器	小型甕E	体部～底部	不明	不明	16.0	(体部)	7.0	(8.9)	ナデ+指頭圧痕	ナデ+ハケメ	指頭圧痕

第6章 遺物

No.	遺物台帳 No.	遺構名	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
													外面	内面	底部
34	40	SB 1	カマド付 近	須恵器	甕	体部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	タタキ	ナデ	不明
35	18	SB 1	床面	須恵器	甕	体部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	タタキ	ナデ	不明
36	18	SB 1	床面	須恵器	甕	体部	不明	不明	不明	不明	不明	不明	タタキ	ナデ	不明
37		SB 2	覆土	土師器	坏A	口縁部～底 部	11.9	—	11.9	(口縁部)	5.2	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
38		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	口縁部～体 部	10.2	—	10.2	口縁部?	不明	(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
39		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	口縁部～体 部	11.6	—	11.6	(口縁部)	不明	(2.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
40		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	6.2	(体部)	4.8	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
41		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.1	(体部)	4.6	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
42		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	9.5	(体部)	7.8	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
43		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.6	(体部)	4.8	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
44		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	8.3	(体部)	5.8	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
45		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	8.4	(体部)	4.4	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
46		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	8.3	(体部)	4.6	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
47		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	8.0	(体部)	5.4	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
48		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	8.5	(体部)	5.4	(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
49		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	8.1	(体部)	5.6	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
50		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.0	(体部)	4.8	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
51		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.7	(体部)	5.2	(2.0)	ロクロナデ+工 具	ロクロナデ	回転糸切り
52	31	SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.5	(体部)	5.8	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
53		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.8	(体部)	5.6	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
54		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	8.3	(体部)	5.6	(0.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
55		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.4	(体部)	4.6	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
56		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	9.0	(体部)	5.4	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
57		SB 2	覆土	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	8.5	(体部)	5.2	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
58		SB 2・3	覆土	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	9.0	(体部)	5.7	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
59	22	SB 2	覆土1層	土師器	坏A	口縁部～底 部	14.3	—	14.3	口縁部	7.3	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
60	30	SB 2	覆土1層	土師器	坏A	口縁部～底 部	14.0	—	14.0	(口縁部)	7.2	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
61		SB 2	覆土1層	土師器	坏A	体部～高台	不明	—	9.6	(体部)	7.8	(2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
62		SB 2	覆土1層	土師器	坏	体部～底部	不明	—	6.5	(体部)	4.4	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
63		SB 2・3	覆土	土師器	坏	底部	不明	—	6.6	(体部)	6.4	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
64		SB 2	覆土1層	黒色土器A	坏A	口縁部～底 部	14.4	—	14.4	(口縁部)	6.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り
65		SB 2	覆土1層	黒色土器A	坏A	体部～底部	不明	—	7.1	(体部)	4.4	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り
66		SB 2	覆土1層	黒色土器A	坏A	体部～底部	不明	—	10.3	(体部)	6.4	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り
67		SB 2	覆土2層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.6	(体部)	4.8	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
68		SB 2	覆土2層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	6.3	(体部)	4.8	(0.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
69		SB 2	覆土2層	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.9	(体部)	4.4	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
70		SB 2	覆土2層	土師器	坏	体部～底部	不明	—	6.8	(体部)	6.2	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
71	62	SB 2	カマド	土師器	坏A	口縁部～底 部	11.2	—	11.2	(口縁部)	5.2	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
72	52	SB 2	カマド	土師器	坏A	口縁部～底 部	11.2	—	11.2	口縁部	5.6	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り

第6章 遺物

No.	遺物台帳 No.	遺構名	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
													外面	内面	底部
73		SB 2	カマド	土師器	坏A	口縁部～底部	11.8	—	11.8	(口縁部)	5.4	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
74	67	SB 2	カマド	土師器	坏A	口縁部～底部	11.8	—	11.8	(口縁部)	5.8	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
75	71	SB 2	カマド付近	土師器	坏A	口縁部～底部	11.6	—	11.6	口縁部	5.9	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
76	50	SB 2	カマド付近	土師器	坏A	口縁部～底部	11.4	—	11.4	(口縁部)	4.8	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
77	69	SB 2	カマド付近	土師器	坏A	口縁部～底部	11.8	—	11.8	口縁部	5.8	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
78	59	SB 2	カマド	土師器	坏A	口縁部～底部	12.8	—	12.8	口縁部	6.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
79	28	SB 2	床面	土師器	坏A	口縁部～底部	11.6	—	11.6	(口縁部)	5.4	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
80	26	SB 2	床面	土師器	坏A	口縁部～底部	12.2	—	12.2	口縁部	5.6	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
81	25	SB 2	床面	土師器	坏A	口縁部～底部	11.0	—	11.0	(口縁部)	6.2	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
82	31	SB 2	SB 2 P10	土師器	坏A	口縁部～底部	13.0	—	13.0	(口縁部)	6.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
83	27	SB 2	床面	土師器	坏A	口縁部～体部	12.4	—	12.4	(口縁部)	不明	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
84		SB 2	カマド	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	8.0	(体部)	5.4	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
85		SB 2	カマド付近	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.3	(体部)	5.6	(0.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
86	27	SB 2	床面	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	9.1	(体部)	6.3	(1.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
87	60	SB 2	カマド	土師器	坏A	口縁部～底部	14.2	—	14.2	(口縁部)	6.8	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
88	82	SB 2	カマド付近	土師器	坏A	口縁部～底部	13.8	—	13.8	口縁部	7.1	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
89	64	SB 2	カマド	土師器	坏A	口縁部～底部	14.8	—	14.8	口縁部	7.2	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
90	65	SB 2	カマド	土師器	坏A	口縁部～底部	15.0	—	15.0	口縁部	6.0	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
91		SB 2	床面	土師器	坏A	口縁部～底部	14.6	—	14.6	(口縁部)	5.6	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
92		SB 2	SB 2 P10	土師器	坏A	口縁部～底部	12.8	—	12.8	(口縁部)	7.2	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
93		SB 2	カマド	土師器	坏A	体部～底部	不明	—	7.0	(体部)	6.8	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
94	68	SB 2	カマド	土師器	坏A	底部	不明	—	7.2	底部	7.2	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
95		SB 2	SB 2 P 8	土師器	坏A	底部	不明	—	6.6	(脚部)	6.4	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
96		SB 2	SB 2 P10	土師器	坏A	底部	不明	—	6.8	(底部)	6.8	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
97	51	SB 2	カマド	黒色土器A	坏A	口縁部～底部	14.0	—	14.0	(口縁部)	8.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ+ミガキ+黒色	回転糸切り
98		SB 2	カマド付近	黒色土器A	坏A	口縁部～体部	14.6	—	14.6	口縁部	不明	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミガキ+黒色	不明
99	26	SB 2	床面	黒色土器A	坏A	口縁部～底部	15.8	—	15.8	(口縁部)	7.7	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ+ミガキ+黒色	回転糸切り+工具ナデ
100	61	SB 2	カマド	黒色土器A	坏B	口縁部～底部	12.4	—	12.4	(口縁部)	6.9	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ+ミガキ+黒色	回転糸切り
101	66	SB 2	カマド	黒色土器A	坏B	口縁部～底部	14.4	—	14.4	(口縁部)	7.9	6.3	ロクロナデ	ロクロナデ+ミガキ+黒色	回転糸切り
102	25	SB 2	床面	黒色土器A	坏B	口縁部～底部	13.4	—	13.4	口縁部	7.4	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ+ミガキ+黒色	回転糸切り
103	55	SB 2	カマド	黒色土器A	坏	体部～底部	不明	—	9.2	(体部)	7.3	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミガキ+黒色	回転糸切り
104	24	SB 2	床面	緑釉陶器	坏	口縁部～体部	12.6	—	12.6	(口縁部)	不明	(3.8)	ロクロナデ+ヘラミガキ	ロクロナデ	不明
105		SB 2	カマド付近	土師器	甕	体部～底部	不明	不明	12.2	(体部)	9.2	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	網代
106	54	SB 2	カマド	土師器	小型甕D	口縁部～体部	17.4	15.6	17.4	(口縁部)	不明	(8.2)	ロクロナデ	ロクロナデ+ハケメ	不明
107		SB 3	覆土	土師器	坏A	口縁部～底部	12.4	—	12.4	口縁部	6.4	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
108		SB 3	覆土	緑釉陶器	坏	体部～底部	不明	—	10.0	(体部)	9.4	2.2	ロクロナデ+緑釉	ロクロナデ+緑釉	回転糸切り
109		SB 4	覆土1層	灰釉陶器	坏	体部～底部	不明	—	10.3	(体部)	7.6	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ+灰釉	回転糸切り
110		SB 4	覆土1層	須恵器	甕	体部～底部	不明	—	22.1	(体部)	12.6	(13.4)	タタキ	当て具+ナデ	ナデ
111	9・10	SB 5	カマド付近1層	土師器	坏A	口縁部～底部	11.2	—	11.2	口縁部	4.0	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り

第6章 遺物

No.	遺物台帳 No.	遺構名	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
													外面	内面	底部
112	4	SB 5	カマド付 近1層	土師器	坏A	口縁部～底 部	11.0	—	11.0	(口縁部)	5.4	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
113		SB 5	覆土1層	土師器	坏A	口縁部～底 部	11.2	—	11.2	口縁部	4.6	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
114	4	SB 5	カマド付 近1層	土師器	坏A	口縁部～体 部	14.4	—	14.4	(口縁部)	不明	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
115	9	SB 5	覆土1層	土師器	坏A	口縁部～体 部	10.8	—	10.8	(口縁部)	不明	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
116		SB 5	覆土1層	土師器	坏A	体部～底 部	不明	—	7.1	(体部)	5.2	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
117	10	SB 5	カマド付 近1層	土師器	坏A	口縁部～底 部	14.1	—	14.1	(口縁部)	7.9	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
118		SB 5	覆土1層	土師器	坏A	体部～底 部	不明	—	7.7	(体部)	7.7	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り?
119		SB 5	覆土1層	土師器	坏B	体部～底 部	不明	—	8.8	(体部)	7.8	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
120	2	SB 5	覆土1層	土師器	坏	体部～底 部	不明	—	10.3	(体部)	7.2	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
121	4	SB 5	カマド付 近1層	黒色土器A	坏B	口縁部～体 部	16.6	—	16.6	(口縁部)	不明	(5.2)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	不明
122	3	SB 5	覆土1層	黒色土器A	坏B	口縁部～体 部	16.2	—	16.2	(口縁部)	不明	(5.8)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	不明
123		SB 5	覆土1層	黒色土器A	坏C	体部～底 部	不明	—	5.9	(体部)	(5.6)	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	静止糸切り?
124		SB 5	覆土1層	灰釉陶器	皿	体部～底 部	不明	—	9.2	(体部)	(5.2)	(1.7)	ロクロナデ+灰 釉	ロクロナデ+灰 釉	回転糸切り
125	6	SB 5	カマド付 近2層	土師器	坏A	口縁部～体 部	16.0	—	16.0	(口縁部)	不明	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
126		SB 5	覆土2層	土師器	坏A	体部～底 部	不明	—	8.5	(体部)	5.8	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
127	1	SB 5	覆土2層	土師器	坏	体部～底 部	不明	—	9.9	(体部)	7.8	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗により不 明
128	5	SB 5	覆土3層	土師器	坏A	口縁部～底 部	11.6	—	11.6	(口縁部)	5.8	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
129	13	SB 5	カマド	土師器	坏A	口縁部～底 部	11.4	—	11.4	(口縁部)	6.4	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	摩耗により不 明
130		SB 5	カマド付 近	黒色土器A	坏A	口縁部～底 部	12.0	—	12.0	口縁部	6.2	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り
131	14	SB 5	カマド3 層	黒色土器A	坏	体部～底 部	不明	—	11.8	(体部)	6.6	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り
132	14	SB 5	カマド3 層	黒色土器B	坏C	口縁部～底 部	11.0	—	11.0	(口縁部)	4.4	5.0	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り
133	81	SB 8	覆土	土師器	皿A	口縁部～底 部	10.9	—	10.9	(口縁部)	5.2	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
134	80	SB 8	覆土	土師器	皿A	口縁部～底 部	14.5	—	14.5	口縁部	4.8	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
135		SB 8	覆土	黒色土器A	坏B	体部～底 部	不明	—	8.5	(体部)	6.8	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り
136		SB 8	覆土	土師器	小型甕D	口縁部～頸 部	13.2	—	13.2	口縁部	不明	(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
137		SK 1	覆土	土師器	坏A	体部～底 部	不明	—	9.4	(体部)	5.8	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
138	78	SK 3	覆土	土師器	坏A	口縁部～体 部	10.8	—	10.8	(口縁部)	不明	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
139	77	SK 3	覆土	土師器	坏A	体部～底 部	不明	—	8.3	(体部)	5.0	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
140	78	SK 3	覆土	土師器	坏A	体部～底 部	不明	—	7.6	(体部)	8.2	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
141	74・77	SK 3	覆土	土師器	坏A	口縁部～底 部	13.6	—	13.6	(口縁部)	6.8	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ(切り)離 し不明
142	75	SK 3	覆土	土師器	坏A	口縁部～底 部	13.8	—	13.8	(口縁部)	8.9	(5.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
143	76	SK 3	覆土	土師器	坏	体部～底 部	不明	—	7.4	(台部)	7.4	(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
144	79	SK 3	覆土	黒色土器B	坏B	体部～底 部	不明	—	13.2	(体部)	7.7	(4.0)	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	ロクロナデ+ミ ガキ+黒色	回転糸切り+ 工具ナデ
145		SX 1	覆土	土師器	坏A	体部～底 部	不明	—	7.8	(体部)	7.8	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
146		SX 1	覆土	灰釉陶器	坏	口縁部～体 部	14.2	—	14.2	口縁部	不明	(3.7)	ロクロナデ	ロクロナデ+灰 釉	回転糸切り
147		SX 1	覆土	土師器	甕	口縁部～体 部	23.6	—	23.6	口縁部	不明	(6.3)	ロクロナデ+ハ ケメ	ロクロナデ+ハ ケメ	不明
148		SX 1	覆土	土師器	甕	口縁部～体 部	23.6	—	23.6	口縁部	不明	(4.8)	ロクロナデ	ロクロナデ+ハ ケメ	不明
149		検出	覆土	土師器	坏A	体部～底 部	不明	—	10.2	(体部)	5.2	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
150		検出	覆土	灰釉陶器	坏A	体部～底 部	不明	—	10.0	(体部)	7.2	(2.0)	ロクロナデ+灰 釉	ロクロナデ+灰 釉	回転糸切り

第6章 遺物

No.	遺物台帳 No.	遺構名	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
													外面	内面	底部
151		発生土	覆土	灰釉陶器	皿D	口縁部～底 部	11.4	—	11.4	(口縁部)	6.2	1.9	ロクロナデ+灰 釉	ロクロナデ+灰 釉	回転糸切り
152		検出	覆土	須恵器	甕	口縁部	不明	—	不明	不明	不明	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
153		発生土	覆土	灰釉陶器	短頸壺	頸部～体部	不明	6.8	15.1	(体部)	不明	(4.0)	ロクロナデ+灰 釉	ロクロナデ	不明

() は残存している部分の法量。

第10表 中世の遺物観察表

No.	遺物台帳 No.	遺構名	層位	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
													外面	内面	底部
154		検出	覆土	中世陶器	壺形合子 蓋	体部	2.2	—	5.1	(体部)	不明	1.3	ロクロナデ+釉	ロクロナデ	回転糸切り
155		検出	覆土	中世陶器	内耳鍋	体部～底部	不明	—	29.4	(体部)	26.0	(7.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明

() は残存している部分の法量。

第11表 金属製品観察表

No.	遺物台帳 No.	遺構名	層位	名称	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)
156	15	SB 1	覆土 1 層	鎌	鉄	(13.7)	2.2	0.4	26.2
157	19	SB 1	覆土	不明	鉄	(3.1)	(0.7)	0.6	2.8

() は残存している部分の法量。

第12表 石製品観察表

No.	遺物台帳 No.	遺構名	層位	名称	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
158	29	SB 2	覆土 1 層	砥石	砂岩	(8.2)	5.9	2.3	270.4

() は残存している部分の法量。

第13表 ガラス製品観察表

No.	遺物台帳 No.	遺構名	層位	名称	材質	直径 (cm)	孔径 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)
159	35	SB 6	覆土 1 層	小玉	ガラス	0.56	0.21	0.43	0.2
160		SB 6	覆土	小玉	ガラス	0.42	0.21	0.35	0.1